（仮題）ブラウニーの特異個体として扱われています

セレンディ

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

何の因果かわからないが、ブラウニーとしていわゆる憑依転生してしまったっ！

人類滅亡から司令官発見までをとりあえず生き抜いたブラウニーは、オルカ号への合流を目指す。

（世に出ない名作より夜に出た駄作タイプなのでとりあえず出しました）

目次

発端（1／4）―― 1
発端（2／4）―― 7
発端（3／4）―― 10
発端（4／4）―― 15
ネオディムに質問された話 ―― 18
メイとナエンに泣きつかれて頭が痛い話 ―― 24
リーゼとソワンとリリスに縛られてた話 ―― 35
レアに付きまとわれてそれからの話 ―― 44
ティタニアが相談を持ちかけてきた話 ―― 54
アリスに愚痴られた話 ―― 61
エミリーに見つめられた話 ―― 67

発端（1／4）

『ザザ……ピッ』

意識が浮上する。

荒涼とした風が頬を撫で、そこに含まれた鉄と火薬の匂いが鼻をくすぐる。

『ザ……ピッ……生命反応……！　第7分隊、誰か生きているのか!?』

目に光が入り、遠くから銃砲の音が響く。

ざぁっと何かがやってくるような感覚がして、その直後から体の感覚が発生する。いや、復活したと言った方がいいか。

『ザザ、ザー……ピッ……第7分隊、応答せよ！　第7分隊！　誰でもいい！　インペットでもノームでもレプリコンでもブラウニーでもいい！　生きているなら応答してくれ！』

目を開けば、青い空と瓦礫の山が目に入ってくる。

体を起こせば、周囲には死体の山。

不思議と若い娘だけの死体が周辺に転がっていた。というか、この状況で自分も死体の仲間入りしていないのは何故なのだろうか？

そんな疑問が頭を掠めたが、近くに転がる通信機をつかむ。

操作は言われるまでもなく解るようなデザインだ。

「はい」

『ザッ……ピッ、その声はブラウニーか？　ブラウニー……8846番？　第7分隊、全滅したはずではなかったのか？　現状を報告せよ』

凛々しい声。脳裏にマリーという名前が浮かぶ。

周囲の死体それぞれにも名前が浮かぶ。インペット、ノーム、レプリコンが数人、イフリートが1人、ブラウニーが沢山。自分もブラウニー。ふと、見下ろせばぴっちりした戦闘用スーツのお腹に大穴が空いている。自分が寝ていたあたりには血と内臓がたっぷりとぶちまけられている。

明らかに致死量の出血と損傷だが、今の自分の体にはかすり傷ひとつない。スーツの破れた、あるいは穴が空いた部分の下に一切の傷が

ない。
　そして、ここに至る状況の記憶がない。名前も何も思い出せない。ブラウニーが自分の名前であるようだが、それは自分の名前ではないという確信がある。自分は何をしていた？　ただの勤め人ではなかったか？　戦闘用ではないスーツに腕を通し、オフィスのデスクが主戦場。キーボードを叩き、割とその場限りの芸術品をつくりあげるのが仕事だったはずだ。
「……現状は報告できる。つい今しがた起き上がったばかりで、周辺にはバイオロイドの死体と瓦礫しかない。見渡す限りで生きているのはわたしだけ。経過報告は不可能。現状認識の開始がつい先ほどだからだ。わたしはなぜここにいる？　わたしはオフィスワーカーではなかったか？　私の誕生日は１９ＸＸ年のはずだが」
『ザザザ……ザー……ピッ……記憶の混乱か？　ブラウニー８８４６。だが今は２１１３年だ、そしてお前は兵士だ。私の命令には従ってもらわねばならん。今は死にかけのブラウニーですら貴重な戦力なのだからな。残存戦力がいたら取り纏めて指示下に入れて、周辺状況に変化があったら報告を入れろ。そして、ＨＱに群がる鉄虫に攻撃を行え。撤退は許されん』
「……了解した。後で色々と聞かせてくれ」
『ザ……ピッ……この状況を切り抜けられたらいくらでも付き合おう』
「……。ブラウニー８８４６、殲滅任務を開始する。ブラウニー、アウト」
　状況はわからないことだらけだが、とりあえず現状を切り抜けねばならない。
　私のものと思われるライフルは真っ二つだったので、死んでいる別のブラウニーのそれを拝借。予備マガジンも、持てるだけ。服を剥いで即席の鞄を作る。
　レプリコンの軽機関銃と、インペットのＲＰＧも一揃いずつ。きっと役に立つ。
　発泡コンクリートグレネードは品切れだった。むべなるかな。

イフリートの迫撃砲は流石に持っていけない。重すぎるし、大きすぎる。
瓦礫の向こうに、レッドフードの死体とチャリオットを見つけた。機動力向上は幸先がいい。
エンジンにも問題なく火が入った。
ＨＱとはどこだ、とも思ったが、銃砲の音がする方で間違いあるまい。
音もなく浮遊するチャリオットに乗り、ハンドルを捻る。バイクとはまた異なる操作感に多少困惑するも、３６０度移動可能なこれはなかなか便利だ。
道すがら、発見したチックを搭載火器で始末しながらＨＱへとひた走る。
それにしても、２１１３年か。
確か、人類絶滅の前年だったか……。
ラストオリジンという単語が頭に浮かぶ。
そう、ラストオリジンだ。
ゲームだ。ゲームだったはずだ。
ムッチムチのボッインボインだったはずだ。
Ｔ１ゴブリンの一件を教訓に、女性ホルモンがマシマシの調整を受けている、だったか……事実、今の私のブラウニーの身体も、前の職場にいれば不躾な視線の集中砲火を連日受けていたに違いない。
レッドフードのチャリオットはとても使い勝手がいい。が、そもそも残弾が少なく、燃料も残り少ないようだ。であるならば、置物となってしまう前に、最後の使い方としてはこうするのがベストであろう！
トリガーを射撃状態で固定しつつ、ハンドルもフルスロットルに固定して飛び降りる。向かわせる先は鉄虫連結体、確かストーカーといったか……よく狙って、狡猾に後方を狙撃してくる手合いだ。もっとも、インペットのＲＰＧで誘爆させたチャリオットに巻き込まれてもういないが。
市街地という地形は基本的に攻めている側に不利に働く。移動す

る側は遮蔽を用意しにくく、守る側はその逆だからだ。よって、攻撃のために姿を晒しており、なおかつそこを後ろから急襲した私にはとても都合の良いことに、レプリコンのライトマシンガンにより丸ごと薙ぎ払えるということになる。

ガガガガガ、と銃声を奏でるたびに、その先のチックやら何やらが弾けて倒れる。時折誘爆による爆発がさらに発生して、追加でその周辺が薙ぎ倒される。

……納得がいかん。

こいつら、非常に脆い。1—X前半代とかそういうレベルの耐久性だ。なぜこんな連中にやられる？　脳波で人間と誤認したか？　いや、指揮者がいる以上それはあり得ない。

疑問は後回しだ。HQ外部はあらかた排除し終えたので、次は内側の虫を排除する。

ようやくブラウニー本来の武装、F2060の出番だ。今までは遠すぎたりもっと適正な武装があったりで出番がなかった。弾薬庫もあるだろうし、どうせ戦死者からの回収もできる。弾薬節約はそこまで考えず、押せ押せで行くか。

「もはやここまで……か」

マリー3号はなんとはなしにつぶやいた。

鉄虫の撃滅作戦のために作られた司令部は、今や風前の灯であった。

交戦開始から程なくして、互いに凄まじい消耗戦となり、母数が多かった鉄虫側にじわじわと追い込まれ、司令部が包囲され。陣頭指揮を取っていたが、狙撃により重傷を負い、後方の司令室に放り込まれそこから指揮を取るも形勢はちっとも立て直せず。包囲の外側の生き残りをかき集めて攻撃させたが焼石に水。司令室入口の隔壁の向こうから爆発振動が伝わってきて、そこまで押し込まれたかと考える傍ら、ついには出血が多すぎて意識が朦朧としてきた。

と、司令室の隔壁が開く。破壊されるのではなく、開いたのだ。

「誰だ…？」

目を向けた先にいたのはブラウニー。
だが、その冷たい目と雰囲気は、以前見たブラウニー８８４６とはかけ離れていた。あまりの目線の冷たさに、死神が姿を借りてやってきたのか、とでも非現実的なことを思ったが、当人はマリーに近寄ると手当を始めた。
「いい……もはや致命傷だ。緊急修復材も使い切った」
そう、バイオロイドとしての頑健さでまだ生きているだけのことであり、出血がいまだ止まらない以上、自分の死は確定していることだった。
「約束が違うぞ」
ぽつ、とブラウニーが言う。見た目の印象はかけ離れているのに、声は以前と同じだった。
「私の話に付き合ってくれるのではなかったのか？」
「それは……すまないな。記憶の混濁ではなく引き継ぎだとすれば、トモの突然変異個体とそれから続く慈悲深きリアンへの継承だが、ブラウニー８８４６にそのような様子はなかった」
ごほごほ、とマリーは咽せる。
「そもそもコードがＴ２のブラウニーにそんなことはあるはずもない。であれば……だ。いいか、笑わずに聞くといい。お前は異世界転生を果たしたのだ。元の人物……この場合はバイオロイドだが、そやつが死んだ時に完全回復して入れ替わる形でな。でなければ、早期に全滅したはずの第７分隊に生き残りがいるものか」
「……」
「ちなみに……笑うところだぞ？　案元はイフリート３１１の持っていた雑誌だ」
「……」
「……どうした？　ああ、私は自己の存在は、それを認識する自意識が最も確りとしたものであり、コギト・エルゴ・スムということ以外に考える必要は」
「そうではない」
マリーの言葉をブラウニーが遮った。

霞む目で見上げてみれば、困惑したような、苦笑するような顔をしている。
「私の記憶では、２０２０年少し前程度か、その辺りでは、そのような内容の小説が流行ったのだ。だから……私もまさかとは思っていた。だが、いくらあり得ないようなことでも、状況に合致するならば納得するしかあるまい？」
マリーは絶句した。だが、先ほど自分が言いかけた通り、要は自分がどう思うかだ。
例え今の時代、胡乱な目で見られようとも、『転生者』というアイデンティティがある事は、マイナスではあるまい。
早晩、人類は絶滅するだろう。
鉄虫による侵攻を食い止める手段はもはやないに等しい。メイやレアによる大規模破壊を行なっても、仕留めきれないものは確実に出る。来たるバイオロイドと鉄虫の時代、どう、すべきか。どう、生きられるだろうか。
まあ、彼女次第だろう。
「さて……そろそろ、疲れた。少し、眠る」
「……ああ。おやすみ」
ブラウニーの返事を聞いて、軽くフッと笑うと、マリーは眠った。
「……」
ブラウニーはマリーを数秒見つめた後、踵を返すとそこにあった煙草を手に取る。同じくそこにあったライターを使って火を着けると一服。後は「いつも通り」煙草を胸ポケットにしまおうとして、煙草はブラウニーの豊かな胸に弾かれて床に落ちた。
「……」
煙草を拾い上げ、机にライターごと置くと、ブラウニーはそのまま司令室を出た。
「まずは墓か……」

発端（２／４）

さて、端的に述べよう。

あれから、およそ６０年ほどが過ぎた。

端折りすぎと我ながら思うが、まあ仕方がない。

スチールラインの旅団１つまるごとを弔った後、私は別のレッドフードのチャリオットを整備して、物資弾薬を積んだカーゴを牽引しながら当て所ない放浪へと身を躍らせた。

いや、本当に当て所などないのだから。覚えている限りの年表でも、鉄の王子が眠ってから次の行で人類はヒュプノス病により全滅、さらにその次の行では２１７１年で２１分隊が主人公を発見する、という内容だったし、その間の内容も実は大したことが無い。いや、エヴァがヒュプノス病対策を見つけていたんだったか？　まあいい。

スチールラインの制服は放浪を始めて割とすぐに脱いだ。替えが手に入らなかったのもあるが、私がブラウニーなのはほぼ見た目だけだという自覚もあるからだ。

レモネードは当然のようにこちらに接触してきたが、レモネードはレモネードでもそれがアルファからオメガの間の誰かがわからない。旧人類滅ぶべし的な感覚は変わらないので、相手が万一オメガだったら面倒臭いことになることもあり誘いは蹴った。当然向こうは怒っていたが、知ったことではない。

ラビアタの抵抗軍には普通に接触した。とりあえず、彼女らには私はブラウニーの特異個体として扱われている。集めてきた物資と引き換えに、足りない食糧や健康診断、あるいは私が何者なのかの調査をしてもらったり。つまるところスカベンジャーとしてのライフスタイルを成立させていたのだ。

そこで小耳に挟んだことだが、どうも人類滅亡前は、レベルとリンクの概念が無かったらしい。驚きだ。そして、さもありなん、とも。ノーリンクＬｖ１であれば、それらを大量投入したところで……である。かのスチールラインの旅団が壊滅したのもそれが理由だろうか。

そうだね、バイオロイドには人権もないし、戦争の場では使い捨て

だもんね。
とすると、マリー4号の副官だった歴戦個体のブラウニーはレベルとかが上がっていたのだろうか？
ちなみに、診断してもらったところ、私はリンクの形跡はないが、作業効率は推定１０リンクだそうである。
「……１０？」
と診断してくれたドクターに聞き返してみたが、
「うーん、テスト結果は理論上の最高効率である5リンクをはるかに越えた性能発揮なんだよね、だからそう表現するよりない……という感じ」
とのこと。
「あとね。あなたにはそもそもの運用モジュール自体がないよ」
「……は？」
「体とかはちゃんとバイオロイドブラウニーなんだけど……あるべき軍用兵士としての運用モジュール自体が見当たらないの。ちょうど分解してモジュールを資源にしちゃった後みたい」
「……私が様々な銃器やビークルを扱えていたのはモジュールのおかげだと思っていたのだが」
「こっちもだよ。それなのにあの作業効率だし、試してもらえば試してもらうだけ全部軽々と扱ってくれるし、訓練過程とかどこいったの？」
「持てば使い方が頭に浮かぶので、てっきりモジュールとばかり」
「……なんなの、オカルトかなにかなの？」
「私、何者？」
「だからこっちが知りたいよ！」
とまあ、私の正体不明っぷりがよーくわかっただけで、特にそれ以外の進展はなかったのだ。
で、なんで６０年弱が経過したのかがわかったのかと言うと、ここ最近だが、積極的にこちらを襲ってこなかった鉄虫が、行動をいわゆるアクティブモンスターへと切り替えたからだ。関連性は知らないが、主人公が見つかったあたりで、鉄虫が行動を変えたらしい。まあ、

人類がいなければ鉄虫からみてまあ大体無害なバイオロイドだが、人類の生き残りがいるのであれば話は変わってくるからであろう。
私自身、何でもかんでもどうにかできるとは思っていないが、逆に戦力としての価値が低いとも思っていない。
そこで、ラビアタの抵抗軍に連絡を取る……取りたかったのだが、そういえば初期はラビアタに連絡がつかないのだったか……？　21分隊の位置を聞きたかったのだが、まあ仕方あるまい。彼女ら、あるいは司令官も含めた彼らは常に戦力増強の要に駆られているはずで、ゲーム上は表現しきれていなかったが勧誘や救出がその下にはあったはずであるので。その電波をキャッチできればこちらからでも出向く事はできるだろう。
……というところで本日の鉄虫の襲撃である。うぜえ。

発端（３／４）

サプレッサー付きのライフルで、遠距離からナイトチックのボディを貫く。

ハーベスターのコア部分をふっとばし、ナイトチックシールダーをシールドごと貫通させ、ビッグチックも問答無用で射殺。

本来、ブラウニーはＦ２０６０ＡＲを使うので交戦距離はかなり近いものとなるようだが、武装にとらわれない私はそんなことはない。遠慮なく、遠距離から狙撃してぶち抜いてやる。時折、反撃かあるいは制圧射撃のつもりか、いくらか銃弾が飛んでくることもあるが、こちらの位置を捉えきれていないのか少しずれた所に飛ぶので避けずとも掠りすらしない。

そうやって、進路上の鉄虫をなぎ倒し、時に弾薬節約のために貰ってきたチタンカタナ（そう、魔法少女マジカルモモの装備である）でスパっとやったり。

私の戦闘能力もそうだが、この鉄虫すら切断できるカタナは一体どうなっているんだ……？

さて、それはともかく、鉄虫に乗っ取られた廃工場、地下通路、渓谷に隠された研究所、とあんまり覚えていないが確かキーワードだったよな、特に最後。とはいえ、もはやほぼ覚えていないに等しい。

ので、ＩＦＦにて強めに信号をぶちまける。ちなみに、認識情報はマリー３号の旅団所属時のままのものを使用した。

これで応答があればいいのだが……。

◆　◇　◆

「っ!?」

マリー救出作戦の最中、突如グリフォンが驚いた顔をした。

「どうした？　グリフォン」

気になったので問いかけてみると、

「ちょ、ちょっと人間!?　鉄虫の群れの反対側に、スチールラインの旅団員の信号が現れたの!?　どういうこと!?」

？

こちらが聞きたい。

「どういうことだ？　スチールラインの旅団員ということは、マリーの信号か？　それとも援軍か？」

「隊長の信号じゃないわ！　えっ、これ、しかも、６０年前に壊滅した旅団のＩＦＦじゃない！　どういうこと!?」

だからこちらが聞きたいが、正体不明存在、一応推定援軍と考えていいのか？

「……マリーの救出作戦を遅らせるわけにはいかない。一応友軍として考えるが、欺瞞情報だった場合の備えをしておいてくれ」

「了解よ！」

「かしこまりました、ご主人さま」

現状の現場リーダー、コンスタンツァの返答を以って指示通達完了として、救出作戦を進める。

信号の位置は、プレデターの推定位置とも違う角度で動いている。ちょうど、救出部隊、プレデター、信号の位置で三角形が描ける感じだ。

「正体不明……敵か、味方か……」

俺以外誰もいない発令所に、つぶやきは消えていった。

適宜指示を出しつつ、救出作戦は続く。邪魔な鉄虫を排除しつつ進むが、信号方面からの鉄虫の圧力が低い。

これはひょっとして本当に援軍なのか？　と考えているところで、ついに信号の主と接触する。

「信号、接触しま……」

「ひいいいいいいいっ!?」

突如、ブラウニーが悲鳴を上げた。

「どうした!?」

「れ、レッドフード大佐っすか!?」

「……い、いえ、大佐のチャリオットですが、乗っているのは違います！　あれ、は……えっ、ブラウニー!?」

映像が回されてくるが、確かにあの顔はオルカにいるブラウニーと

瓜二つだ。一方で、見たこともないチャリオットに乗り込んで縦横無尽に走り回りつつ鉄虫を片付けていく。こちらに攻撃してくる様子がない以上、援軍と考えてよいのだろう。
「……とりあえず敵ではないようだな。鉄虫の排除を続けてくれ」

◆　◇　◆

「ひいいいいいいっ!?」
よくわからないが、接触した瞬間向こうのブラウニーが悲鳴を上げた。
「れ、レッドフード大佐っすか!?」
「……い、いえ、大佐のチャリオットですが、乗っているのは違います！　あれ、は……えっ、ブラウニー!?」
あー。
隣のレプリコンも引きつった顔をしているが、あれか。一種の最上級鬼上官らしいからな、レッドフード。
とはいえ、話をするにはまだ状況はゆっくりしていられるものではない。
「援護する。話は後だ」
「りょ、了解っす！」
「了解しました！　援護に感謝します！」
さて。後は後ろは彼女らに任せて、チャリオット搭載のミサイルで薙ぎ払い、撃ち残しをＡＲで始末する。無論、彼女らとて黙ってみているわけではなく、時折グリフォンのミサイルが鉄虫を吹き飛ばし、あるいはボリ（コンスタンツァが連れている犬）が突撃して足止めを行ってくれるのは素直に助かる。
……さて。
本来の戦力でも成功が約束されている状態で、他のバイオロイドに指揮は出せないが自分で作戦立案みたいなことをして自分で動けて火力もそれなりにあるやつ（つまり私）が加わったら、作戦成功率はどうなるでしょーか？
答えは反撃をもねじ伏せるオーバーキルである。

「隊長〜〜〜!!!」
ココがホワイトシェルから飛び出し、マリーに抱きついて喜んでいる一方、マリー本人は大声を出すなとかよくやったとか喜んでる二方、ヤニが足りなくなってきたので一服する私。
「そこのブラウニー……ブラウニーなのか？　随分と雰囲気が違うが……」
「そうよ、あなた何者？　私達の部隊にあなたみたいなのいなかったわよ!?」
マリーの言葉に反応して、こちらに誰何の声を上げ始めるグリフォン。
まあ、戦闘前にタバコ吸うわけにも行かなかったので禁煙していたせいでヤニが足りなくなったのを我慢できなかった私も悪いが……ということで、携帯灰皿にタバコを消して入れて。
「つと失礼。元、マリー3号麾下旅団所属のブラウニー８８４６です。現在はスチールラインを退職し、拾得、あるいは再生品を使っての資源回収業を営んでおります。有り体に言うと、ブラウニーの特異個体のよう……自分ではよくわかりませんが」
「で、そのスカベンジャーさんが何の用で、私達を援護したの？」
……なんだろうこのツンデレ疑り深いな？　ここまできたら答えなんぞ一つだと思うが……
「そりゃ、人間様が見つかったなんて通信で言ってたら、合流しに来るに決まってるでしょう？」
『知ってたのか』
人間男性の声がする。ホログラフィ表示はない（こちらに投影機器がないからだろう）が、彼が最後の人類、司令官ということだろう。
一応は警戒してこちらに声が聞こえないようにしていたのだろうか？　警戒感を持つことは悪いことではない。
「ええ、それは。なんで知ってたかは後でお話します。私がなぜ特異個体と言われるかにも関わっているので」
『うん……？　まあいい、わかった。一旦帰還してくれ。補給と次の作戦の準備をするぞ』

「そうだな。私も、司令官に報告したいことがある。あの異形の鉄虫の誕生理由など、な……」

と、いうことで、私は無事オルカに合流を果たしたのだった。

発端（４／４）

「なんとまあ……」
　イフリート３３１が持っていた雑誌（中性紙化処理済み）を読んでもらい、マリー３号が半分冗談ながらも提示した可能性――死亡したタイミングで入れ替わる異世界転生という筋書き――が、最も状況に説明をつけてくれる、ということに司令官は感嘆の声を漏らした。
「念の為添えておくと、それが正しいと信じろといっているわけではありませんよ？」
「そうなのか？」
「何を以って信じろというのです？　確かに私はブラウニーの特異個体ではありますが、それはこの事の根拠にはなりませんよ？　というか、証明などできませんから、私はＬＲＬのような言動を心底信じ込んでいるような、あるいは伝説エンターテイメントのような現実と設定を混同させられているようなタイプかもしれませんよ？」
「スチールライン、ひいてはブラックリバーにそんなブラウニーを製造したという話は聞いたことがないな」
　証明しようがない話に、極端な例を挙げて話を終わらせようとしたところ、同席していたマリーが口を挟んでくる。
「……まあ、証明などできないしするつもりもないということが言いたいのです。オルカに合流する意思はあるし作戦行動上で協力するつもりもあります。ですが一般的なブラウニーと性格が異なるので、スチールラインの指揮系統に入るとトラブる可能性があるため独立個人系統として取り扱ってほしい、ということです」
「後半は初耳だが」
「申し添えようとしていたんですよ」
　……なんかよく話の腰を折られるな。
「個人的に得意と自負してることは、廃墟都市を探索して資源をかき集めて回収してくることと、斥候ですね。機動型のような探索は効率で劣りますが、鉄虫に見つからないように物資とか情報とか集めてく

ることは得意ですよ……どうしました？」
「いや……うちのブラウニーと随分と違うんだな、とね」
「呼称上の区別がほしいのであれば、別言語呼びのブラナッハとか、あるいは転生のとかの枕詞をつけるとか……奇跡のトモみたいな」
「ブラナッハで行こう。枕詞は慣れると結局使わなくなる。みんな、マリーは『不屈のマリー』『４号』だがそう呼んでいるのを聞いたことがない」
「了解いたしました」
　ということで私はブラナッハとなった。
「ところで奇跡のトモってなんだ？」
「あー……」
　口が滑ったな。まあいいか、過去の特異個体に目を向けて調べればすぐ判ることだし、キリシマスキャンダルというどデカイ事件にも関わってるし。
「０８０機関のトモは代名詞がバカなぐらい頭が悪いですが……いや、親しみやすさとか学生に溶け込むためにと意図的にそうなっているのですけれどね、突然変異で物凄く頭の回転が早くて思慮深い性格になった個体がいるんですよ。回収されたその個体を元にして新たなバイオロイドが製造されたりした経緯がありまして、なかなかに有名でした」
「ほう……詳しいな」
「単なる雑学ですよ。私がブラウニーの特異個体だというのも納得していただけましたか？」
「……そう……だな……そうだな、認めざるを得まい。正直、単独での資源回収などという危険極まりない任務につかせるぐらいなら、希望を無視してでも私の指揮下に加えたほうがいいと思っている」
　だからか、やたらと関わってくるのは。
「ブラウニーとは性格がまるで違うので指揮系統に馴染みませんし、逆に分隊長とかに据えられても指揮能力なんてありませんよ。総じて部隊行動に向いていません」
「ブラウニーの歴戦個体が私の副官を務めていたこともある。できる

さ」
「あー……有名でしたね、彼女は。とはいえ奇跡のトモがバカさ加減で溶け込むことができないように、私に軍隊行動をさせても雑兵以下にしかなりませんので」
「だがな、」
「……マリー、そこまでにしておこう。やる気が無いものを無理に引き込んでもお互い不幸になるだけだ」
「……はい。閣下がそうおっしゃるのならば」
バレないようにため息をつく。
良くも悪くも部下を見捨てられないのはマリーの長所であり欠点でもある。3号の死因もおそらくは部下をかばって、だろうからなあ……。
ともあれ、司令官の介入でようやっと諦めてくれたようだ。
さて、ここからは自由にやらせてもらうとしよう……。

さらに、さて。
さっきも述べたように、本来の戦力でも勝利できる所に、私があの手この手で支援すると仮定しよう。するとどうなるか？
キム・ジソクの墓所を制圧するまで非常にサクサクとオーバーキルできたということだ。

ネオディムに質問された話

「……ブラナッハ」
「んお？」
　トリアイナの救難信号を、ホライズンの偵察部隊がキャッチしたことに端を発する宝探しと称した休暇に見せかけた特別作戦という名のどんちゃん騒ぎのメインディッシュ終了後（そう、リオボロスの遺産である）。
　浜辺の木陰で潮風に吹かれながらタバコを吹かしていたところ、珍しくもネオディムが話しかけてきた。とりあえずタバコを携帯灰皿に消し入れる。
「ネオディム？　珍しいね。どうしたの？」
「聞きたいことがあるの」
「おや。私に答えられることなら？」
「うん。あのね……愛してるって何？」
「……うん？」
　表情に乏しい私だが、これにはすごく困惑した表情をしていたことだろうと思う。
「話が見えない。もっと詳しく説明してくれる？」
「うん。昨日の夜、司令官がウェアウルフを縛って、でもウェアウルフは愛してる言いながらすごく喜んでた」
「……おーう……」
　リオボロスの遺産でウェアウルフがこぼしてた案件か？
　しかし、これネオディムに見られてたのか……。
「ブラウニーに、このことを話して愛してるって何、って聞いたらものすごい勢いで逃げちゃった。だから、ブラナッハのところに来た」
　人選を間違えとりやしませんかね、それは私も含めて。
「あー……真面目な返事と茶化した返事、どっちがいい？」
「まじめに」
「即答かい。そうだなあ……愛してるって何、か……。茶化していい

ならもっと言いようもあるんだけどなあ……」
「まじめに」
「はいはい。んー、色々とあるが、スタートはまずはその人と一緒にいたい、と言うところから始まる、ってところかねえ。その後の形は人によりけりバイオロイドによりけり千差万別。お互いに一緒にいたいと思ったコンビが、お互いにとって居心地の良い形を追求してく……って感じかな。人類滅亡前は、少ないが人とバイオロイドの間の子供もいたって話だ」
……まあ、これでも結構煙に撒いている自覚はあるが、真面目に頼ってきたネオディムを無碍にするわけにも行くまい。
「こんなところでいいかい？」
と、聞いてみたらなんとネオディムは首を振る。
「……うん？」
「違う。ウェアウルフが司令官と愛してる言いながら愛してるしてた。そっちの愛してるって何？」
……セ●クスのことかー!? うんそっちですよねー!? でなけりゃブラウニーが逃げるわけないもんねー!?
いや真面目すぎる話題に逃げ出したって可能性もなきにしもあらずだけど。
しかも真面目に、かぁ……。
「そっちかー……。そうだなぁ……」
思わずタバコに火をつけようとして、ネオディムの前なので思い止まる。
「バイオロイドは、遺伝子の種から培養すれば増えることができるけどさ。人間は、その『愛してる』、えー、セックスとか交合とかまぐわいとか仲良しとか色んな言い方や隠語があるけどね、動物が交尾して増えるように、人間もそれをして増えるんだ」
「じゃあ、ウェアウルフも子供を産むの？」
「それが難しいところでなあ……。とりあえず今は産まないんじゃないかな。人間がそこらの動物と一番違う所は、子供を作る目的以外でも『愛してる』をする生き物なんだ」

「……どうして？」
さて、ここからが正念場である。
司令官に「純粋な子になんてことをした!?」という目で見られないようにせねば。
「一番の理由は、『それが愛情の確認になるから』かな。よっぽど相手のことが好きじゃないと、されたくないことだけど、そのよほど好きな相手だったら逆にしたいされたいものなのさ。その辺はいいかしら？」
「……わかった。じゃあ、一番じゃなくて、次は？」
「そうねえ。内容が難しいからちょっと長くなるよ。えーっと……人間には、あ、この場合はバイオロイドも含むよ、人間には三大欲求というものがあって、食欲と睡眠欲と、あと性欲」
「うん」
「人間の根源的欲求に根ざしてるだけあって、まあどうやってもこれはほぼなくすことができない。で、これ、面白いことに、愛情があると大体性欲とセット。まー、ぴゅあっぴゅあな愛情がないとは言わないけど、少ないんじゃないだろうか。でもって、悲しいことに逆はあまり成り立たない」
「……そうなの？」
首をかしげるネオディム。
「勘違いしないでね、性欲が先に立っちゃった場合ね。なんていうか……本能優先に近い感じかな。だから、性欲だけが際立っちゃうと、大体の場合に愛情はついてこないわけ」
「そうなんだ」
「悲しいことにね。ただ……人間ってのは理性の生き物だから、お互いの愛情も無しに『愛してる』をするのはやめようね、みたいな暗黙の了解みたいなものがあるわけさ」
「……うん」
「司令官は、まあ例外なく私達を大事にしてくれるさ。だから、ネオディム、あなたも急がなくていい。あなたの中の気持ちをじっくりと見つめてみて、もし、司令官のことが大好きで。その気持が抑えきれ

ないぐらいになったら、司令官に相談してごらん。悪いようにはならないはずだから」
「うん。……でも、この間司令官に好きって言ったとき、『愛してる』しなかったのはどうして？　司令官は私のことが好きじゃない？」
　おっとビーンボール第二号。
「それはないよ。単に、妊娠……子供ができるには、なくてもできるけどそれなりの覚悟や準備があったほうがいいからだね」
「覚悟？　準備？」
「まず、妊娠期間はおよそ１０ヶ月。まあ２～３ヶ月は気づけないものだけど、そこからは激しく動くのはご法度……つまり戦闘には出れなくなるし、出産の時の母体の負担もすごく大きい」
「……戦闘に出れなくなるのはやだな」
「あとねえ……人とバイオロイドの混血児は、大人になるまでに大体１０回ぐらいのやたらと難易度とコストの高い手術が必要になるし、それがクリアできたとしても人間との混血である以上鉄虫に優先的に狙われるからオルカで育てるしかなくなる……必然、育てられる数が限られてくる」
「難しい……」
「難しいのさ。だから……鉄虫との戦争が終わるか、少なくともずっと安全な場所が確保できるまでは、子供を作るのはちょっと……ね。でも、私達バイオロイドの寿命は長いし、あの一件で司令官の体も強化されてるから司令官の寿命も心配しなくていいと思う。だからね、ネオディム」
　一旦言葉を切って、ネオディムをじっと見つめた。
「さっきも言ったけど、急ぐ必要はないし、焦る必要もない。あなたの気持ちを、心を大事に育ててあげてね」
「うん。……ありがとう、ブラナッハ」
「どういたしまして。こういうのは、精神的に大人なやつの義務さね」
「それでも。……ちょっと、行ってくる」
「おう、行ってらっしゃい」
　ふよふよと漂うネオディムを見送り、とりあえずボロを出さずに済

んだことに安堵して。
　タバコに火を点ける。
「……ふぅー……いやほんと必死に考えると疲れるわ……」
「そうねぇ～。でも、とてもいい内容だったとお姉さん思うわよう？」
「ぬぁっ!?　ふぉ、フォーチュン!?」
「はぁい。こんにちはブラナッハ。変なこと話したらアイアンクローのつもりだったけど、必要なかったみたいねぇ？」
　こちらの意味でも危機一髪だったようである。

■　◇　■

　さて、翌日。
　今日の副官は私、ブラナッハことブラウニー８８４６が務めていたところ、午後にネオディムが司令官の執務室にやってきた。
「司令官」
「ネオディム？　どうしたんだ？」
「司令官に、大事な話」
「俺に？」
　執務の手を止めて、不思議そうな顔をしているだろう司令官。
「うん。昨日、ブラナッハに色々と教えてもらったから」
「ブラナッハ？　何を教えてもらったんだ？」
「『愛してる』について」
　びくっと司令官の体が震えた。
「……大丈夫。ブラナッハは言ってた。『愛してる』は愛情があるからすることだけど、それを私にはしないのは、私を大事にしてくれてるからだ、って」
　どことなく、ホッとした雰囲気が指揮官からする。
「あと、言外に私はまだ子供、って言われた。でもね、司令官。私、司令官のこと、好き」
「……ああ」
「司令官のこと考えてたら、少しだけ、体が熱くなったの。これが凄く

熱くなるようになったら……私とも『愛してる』してね」
「確約はできないが……そうだな」
「ふふ……約束だよ」
嬉しそうなネオディムの声。
「それじゃあ……」
「それじゃあ？」
「今日は、ブラナッハと同じこと、するね」
「……」
!?
少し、視線を上に向けてみると、こちらを覗き込んでいるネオディムと目があった。
……司令官の執務机の下、ついで言えば両足の間にいる私と。
「お、おい、まてネオディム」
「これは愛情から、だよね？　それとも……性欲からなの？　理性で、って言ったのはブラナッハだよね？」
「……ハイ、アイジョウデス」
「うん、だよね。だから、私もする」
そう言って、ネオディムは少しばかり私を押しのけて、私と一緒に司令官の足の間に収まった……。

メイとナエンに泣きつかれて頭が痛い話

「……酷い目にあった……」

ネオディムが司令官の執務室に来たその翌々日。

一日飛んでる？　あの野郎人に八つ当たりしやがって腰がいわされて動けなかったんだよ。自分はネオディムの顔に普段よりいっぱい出してた癖に……まあいい。

さすがにやりすぎたとは思ってもらえたようで、翌日と翌々日、つまるところ今日まで休みとなった。相部屋のブラウニーからはなんか凄く謝られたが。

……机の下でやっていたことに気づかれたのもブラウニーの本のせい？　お前しばき倒すぞ？

まあ、なんだかんだで人格が汚染されてきている気がしないでもないが、それでも今日はまっとうに休みである。ちょっと腰がまだカクカクするが。

で、またも木陰でビーチチェアを敷き、その上で怠惰にタバコをくゆらせているわけである。

「うーん……怠惰最高……」

一緒に用意したココナッツミルク（キンキンに冷やしてある）をストローで啜りつつ、潮騒と潮風を全身に浴びながら体の力を抜く。

至福である。

……なのに。

「ブラウニー８８４６！　ちょっとブラウニー８８４６!?　聞いてるの？」

「はいはい聞いてますですよ？」

どういうわけかこのトランジスタグラマーさんが私の隣でガミガミとがなり立てているのである。

「はぁ……メイ隊長にナイトエンジェル大佐まで、なんでそろって休暇中の私の所に来るんです？」

「決まってるじゃない、あなたのおかげでネオディムが司令官と、む、

む、結ばれたのよ？　なら当然、私にも力を貸してくれるんでしょうね？」
　高圧的に言うなら最後までどもらずに言ってくれませんかね、な滅亡のメイと、
「……はぁ……。まあ、このクソガキとネオディムでは話が随分と違うとは思いますが、なんとか力を貸してもらえませんか。面倒な暗黙の了解で、このクソガキの順番が済まないと私達の順番が来ないのです」
　と、面倒そうな呆れ顔のナイトエンジェル。
　あー、思い出した同じ隊の中では階級が上から、か。でも、レオナより前にヴァルキリーがお手つきになってたり、その辺は随分とゆるゆるだったような……あ、思い出した、司令官からのアプローチの場合は別だっけか。
「と言われましてもねえ……。あれは私がネオディムに話をした後というタイミングが凄い悪いか良いかどちらかわかりませんがとりあえず滅多なタイミングで、なおかつそこで私と司令官の双方がトチったから成立しただけですよ？　メイ隊長の場合に活かせるとは思えませんが」
「そうだとしても……何とかご助力願えませんか。この駄肉の空回りを見ているととてもイライラするのですよ」
　……。まあ、イベントのたびに、メイのポンコツっぷりを見て笑っていた記憶はある。離れたところから見て笑う分にはいいが、そこに実害があるとなると話は別、か……。
「いいから協力なさい！　なんなら隊長権限だって持ち出してやるわ！」
「私はドゥームブリンガーでもスチールラインでもないんですけどねえ……まあ、場所を変えましょうか。ちびっこたちに聞かせる話でもないし」
　無論、こうして大きな声をメイが上げているのであれば、注目を集めないわけがない。
　向こうの波打ち際で遊んでいたアクアやらココやらＬＲＬやらが

視線を向けてきているので、仄聞されないためにも（そして第二のネオディム（）を生まないためにも）場所を変えるべきだろう。

■　◇　■

「とりあえず……一つ、確実な手があります」
「どんな!?」
食いつきはえーなオイ。
オルカ号に戻ってきて、休憩用の談話室の一つを占領して。とりあえず言うだけ言ってみるか、ということに実にあっさりとメイは食いついた。
「夜、司令官の部屋に一人で行って、胸でも押し付けて『好き、抱いて』とでも言ってきてください」
「ナイトエンジェルと言ってることが同じじゃない!?」
「いや、実際有効だから言ってるんですよ。シザーズリーゼとかソワンとかブラックリリスとかみたいに互いに足を引っ張り合う相手がいるわけでなし。それだけ露出度の高いっていうか際どい水着（無規制版基準）を着れるんですから羞恥心も抑え込めるんでしょう？　とりあえずメイ隊長が頑張ってそれだけのことをしたら、司令官は悪いようにはしませんよ、ええたぶん」
「多分って何よ!?」
「わたしゃ司令官じゃないから断言できないだけですよ……」
で。そこで勝ち誇った顔をしたナイトエンジェル。
「ほら言ったでしょう。その使いみちのない駄肉を使えばいいと」
「貧相なボディは黙ってなさい！」
「なっ!?」
「後は……んー……他には手がないんですよね、即効性のあるやつは」
「なんでよ!?」
「純情な乙女心をお持ちであること自体は悪いことではありませんが、みんなが司令官を狙っている状況では正直強烈な足枷にしかならないですしおすし」

「……」
　真っ赤になって口をパクパクさせている。……言い過ぎたかなあ。
「悪いことじゃないんですよ。リーゼとかソワンとかリリスとかのキワモノシリーズとか、シャーロットとかウェアウルフとか私以外のブラウニーとかのバカシリーズとかの相手をした後に、メイ隊長の純粋な乙女心は司令官の癒やしになっているのは間違いないです」
「むぅ……」
「では、Ｙｅｓ枕でも抱えて司令官のベッドに潜り込みますか？」
「そんな破廉恥なことできるわけないじゃない！」
「でしょう？」
　でも、純情っ子みたいなこと言ってるけど、水着が破廉恥極まりないんだよなあ……。
「もうめんどくさいので、強硬策とかありませんか？」
　おぉっとナイトエンジェルがぶちまけた。本当メイ関連だと沸点が低い。
「結局、強硬策となると例えば私達がメイ隊長を縛り上げて司令官のベッドに放り込むとかしかありませんよ？　どう考えてもその後のバックファイアが怖すぎるのでやりたくないですね」
「バックファイア、というと？」
　顔の前で指を一本立てる。
「当の司令官からのお仕置き」
「む……」
　二本目。
「司令官の部屋への侵入禁止ルール制定などでコンスタンツァへの無用の負担」
「むぅ……」
　三本目。
「シザーズリーゼ、ソワン、ブラックリリスを筆頭とする物騒な連中からの『私がやりたかったのに』系逆恨み」
「あぁ……」
「わかっていただけましたか？」

「ええ十分に」
　はぁ、とナイトエンジェルはため息を付いた。
「しかし……本当にどうにかなりませんか。メイのガキ単体ではおそらく１００年あっても無様な結果にしかならないでしょう。だからといって私とセットでも、私が冷静さを欠いてしまって碌な事にならないのは先日自覚しました。現状、あなただけが頼りなんです、ブラナッハ」
「ブラナッハ？」
「え……メイ、まさかこのブラウニー８８４６が、ブラウニーの特異個体であることに気づいてらっしゃらない？　確かに顔と身体は同一ですが、雰囲気とか頭とかが別物でしょう？」
「違うわよ、ブラナッハという個体名称がついてることに驚いただけよ」
「なら良いのですが」
　またこいつらはすぐ脱線する……まあ、いい。それならそれで、いっそ逃げ場を潰してみるか。
「……二度使える手ではありませんが……とりあえず、やってみます？」
「おや。なにか思いつきましたか？」
「なんでもいいわ、やるわよ！」
　なんでもやるならとっとと司令官にその駄肉押し付けて抱いてって言ってきてくれませんかねえ……？

■　◇　■

「司令官」
　宝探しの合間に、溜まった執務をこなしていると、ブラナッハが執務室にやってきた。
「ブラナッハ？　今日は休みにしたはずだが」
　ブラナッハは腰を痛めたので昨日と今日は休みにさせたのだ。
……まあ、俺も悪いのは自覚しているのだが。

「いえ、それとは別件で。司令官、今夜、空いてますか？」
「……え？　お前、昨日の今日でそれは……」
「違いますよ、何言ってるんですか」
　呆れたようなブラナッハの視線が俺を射抜く。
　そうか、違うのか……少し、残念な気もする。
「ともかく、その様子では空いているようですね。招待状です」
　どこから見つけてきたのか、意外と綺麗で凝った装飾のついた封筒が執務机に置かれた。
　手にとって、裏返してみると差出人は滅亡のメイ。裏側も凝っており、こちらもどこで見つけてきたのか封蝋までしてある。紋章はドゥームブリンガーだったが。今日の副官であるウェアウルフが渡してくれた取り外した銃剣（ペーパーナイフよこせよ……）でできるだけ丁寧に封蝋を剥がした後、中の便箋を取り出す。封筒とは逆にシンプルな紙に書かれていた内容は、
『今夜、私の部屋でお待ちしています
　滅亡のメイ』
　と、実にシンプル。
「ほう……あのおこちゃま指揮官、随分と考えたね」
「言い過ぎだぞウェアウルフ。男子三日会わざれば刮目して見よなんて諺もあるが、それはメイのような夢見る乙女だって変わらないさ……あと覗くなよ」
「硬いことといいっこなしだよ司令官」
「それじゃ、確かに渡しましたよ」
「ああ、お疲れ様ブラナッハ」
　スタスタとそのまま執務室を出るブラナッハ。
　便箋を見てニヤニヤしながら、なにか気になるのか透かしとかがないかいじくり回すウェアウルフ。
「……破ったり汚したりしないでくれよ？　そういうのも招待状の体裁には大事なんだから」
「いやあ、こんなのを出してくるとは思ってなくてねえ？」
「ブラナッハの入れ知恵だろうが、一から十まで言われたとおりに動

くなんて逆にメイのプライドが許さないさ。色々と提案されつつ、あーだこーだ注文をつけるメイの様子が目に浮かぶよ」
「ほーう……それで司令官。このお誘いは受けるのかい？」
「乙女が勇気を振り絞ったんだ、きちんと受けなきゃ男がすたるね」
「そうかいそうかい。そんじゃ私は乙女の勇気に乾杯といこうかね」
「いや……手伝えよ、執務」
「私にゃむーりー♪　ていうかなんで私を副官に指名したの？　明らかに戦力にならないじゃない。この間のブラナッハの噂みたいに机の下に潜る？」
「やめてくれよ……そもそも宝探しで仕事が溜まってるんだ、仕分けぐらいしてくれ」
　色んな意味で油断できないウェアウルフを監視も兼ねて手伝わせつつ、その日の日中は過ぎていった。

「……さて」
　その後、夜２２時。
　あまり早すぎるのも、「もしかしてさっさと帰るつもりなんじゃ」と思わせるだろうし、ということでこの時間。
　メイの個室のインターホンを押そうとしたところで、貼ってある小さな付箋に気がついた。
『インターホンを鳴らさずにお入りください』
「……？」
　確かに、メイの部屋のドアにはロックがかかっておらず、簡単に開いた。
「……うん？」
　次いで、部屋の照明が落ちている。スイッチの近くには、
『つけないで』
　という付箋。廊下の明るさに慣れた目ではすぐには部屋の中の全部を見渡すことはできなかったが、ベッドサイドのナイトテーブルのテーブルランプが淡い光を放っていて、そこに封筒があるのが見える。歩み寄って見ると、

『司令官へ』
と書いてある。開けて中の便箋を見る以外の選択肢がない。
『司令官へ
好きよ。愛してる。
この一行を書くだけで、便箋１０枚が無駄になってブラナッハからたくさんお小言を貰ったわ。長々と書き連ねて誤字でもしたら、司令官にそんな手紙は出せないし、そもそも便箋がもうないわ。だから短く。
私は直ぐ側のベッドで寝ているわ。お酒も飲んだから、何をされても起きないと思う。朝まで。
生意気で素直じゃなくてツンデレの私を受け入れてくれるなら、起こさないで。
起こさないで、そのまま、朝まで、
愛してください』
「……」
監修、ブラナッハというところか。
考えたな。書いてあるとおり、素直じゃないツンデレのメイの自主性に任せていたら、今のような状況に持ち込むまでどれだけかかっていたことやら。こちらも楽しんでいなかったわけじゃないが……あの妙に人間臭いブラナッハに助言を仰げばこうもなるか。
「……っ」
一方、寝ているはずのメイがこちらをちらちらと伺っている気配がだだ漏れだ。
ちらちらとこちらを見ているのが丸わかりだし、視線を向けたら慌ててもとの姿勢に戻って、挙げ句
「うーん……」
とバレバレの寝返りをうつ。
毛布がずれて、あの酷く扇情的な水着姿が目に入る。というか、あの水着でベッドに入って寝返りを打てば、そりゃあずれる。でも寝ている設定で俺が見ているからずれたのを戻せず、かと言って反応も大騒ぎもできず、結果として顔がその髪の色のごとく真っ赤に染まって

いく。口元がひくついてんぞ……？
「……」
全く、鉄虫撃滅作戦のときに、的確に作戦を立てて爆撃を敢行する際に見せるような凛々しさは欠片もなく、ソワソワして不安にまみれた、素直じゃないただの女の子がそこにいる。
そこにぐっと来てしまったのも、事実だ。
メイからはアルコールの匂いはしないので、単に飲んだ設定であるだけのようだが、口の開いたワインボトルが置いてある。あるいは普段の寝酒用か？　まあ、俺も少しもらおう。
ごくっ、ごくっ……
意外と強いなこれ。
ともあれ、さらにもう一口。そのまま、ベッドのメイにのしかかり（その際面白いように身体がびくっとなって吹き出しそうになったが、我慢した）顎に手を添えてこちらを向かせ、強引に口移しでワインを飲ませる。
「む、むぐ、んっ……!?」
「ほうら……起きてるんだろう？　メイ。嘘つきだな？」
「ふぇ、し、司令官……？」
「嘘つきにはお仕置きしないとな？」
「え、えっ？　え、まって、しれいか、きゃぁっ!?」

■　◇　■

「……怠惰最高……」
昨日の一件で、前払い報酬としてナイトエンジェルの休暇を貰ったので今日も休みである。
成功報酬ではメイの休暇も貰う予定だ。
というわけで、今日も木陰でジュースとタバコとビーチチェアでのんべんだらり……
「……ぶらなっは」
「ぬわぁっ!?」

物凄くしょげかえったメイが、水着仕様の玉座に乗ってすぐそばにいた。
え、まさか昨日のお膳立てで失敗したのか……？
「……も、もしかして失敗したんですか……？」
「……失敗はしなかったわ」
「え……じゃあなんでそんなにテンションが低いんです……？」
そう問いかけてみると……
「ぜんぜんやさしくなかった……」
「……え？」
「おきてたのを、うそつきっていわれて、しばられて、くちにいれられて……」
「……うわぁ……え、もしかして来る前に飲酒なさってたんですか？
司令官」
「……てたの」
「……まさか」
小声にいやーな予感というか予想がよぎり、
「そうよ！　お酒片付けるのを忘れてたの！　で、司令官がそれを飲んじゃって、私にも無理矢理飲ませて！　その後……ひぐっ……やめてって言ったのに……」
要領を得ない泣き言を聞けば、どうにも全穴コンプリート（鼻と耳含む、さすがに目を除く）、それに留まらずズリまでも。ベッドヤクザ（飲酒時限定）かつマジチン（私、ウェアウルフ、ネオディム、メイの反応から）な司令官に一晩でそーとー開発されたらしく、最終的には降りてこられなくなるほどだったとか何とか。
気がつけば朝でラビアタに介護されているところで、遠くからコンスタンツァの説教が聞こえてきたとか何とかかんとか。
司令官には厳重な禁酒令が出された。
なお、後日談として。
一時的に司令官と話すときには私の後ろに隠れるようになったメ

イだが、司令官が誠心誠意謝って仕切り直しをしたところ、くっそ上機嫌でナイトエンジェル（超不機嫌）を伴って私の所に自慢しに来たことを添えておく。

バカップルかよ。

リーゼとソワンとリリスに縛られてた話

さて。

唐突だが、私は今椅子に縛り付けられている。

鋼鉄ワイヤーも編み込んであるタイプの荒縄で、なおかつ濡らされているので縄抜けも難しい。バイオロイドとしての膂力を十全に発揮すればもしかしたら引きちぎれるかもしれないが、その場合はこちらを見ている３人のうち誰かもしくは複数に取り押さえられることだろう。

そう。

私を椅子に縛り付けている下手人どもは、

「くふふっ、くふふふふふっ」

リーゼと、

「……（無言でナイフを研いでいる）」

ソワンと、

「いいえ、私達はちょっと協力していただければ、すぐにでも解放するつもりですよ？」

リリスである。

なお、同室のブラウニー（レベル１００フルリンク）とブラウニー×２（モジュール撤去済み艦内作業員）も同じように椅子に縛り付けられている。

「なななななんなんっすかぁー!?」

「はなせっすぅー！　暴力反対っすぅー!!」

「ほ、捕虜への虐待は条約で禁止されているっすよぉー!?」

非常に喧しい。

とりあえず私も一般ブラウニーの振りをしておくべきか。ついでにジタバタしておく。

「ていうかなんで自分達は縛られてるでありますか!?　説明を要求するっすぅー!」

なんと言おうか、縛られる段階の記憶がない。気づいたら椅子に縛り付けられていたのである。

「だって、害虫のせいで害虫が２匹、増えたでしょう……？」
うわ、私のせいか。ていうか、まあ、簡単に想像できた事態ではあるわな……。
「ですので、私達にも協力してもらいませんとね？」
……笑顔なのに怖いリリスマジコワイ。
「ブラナッハのアホー!!　マジキチ三人衆のトリガー引くとか何考えてんっすかー!!」
「文句はブラナッハに言えっす、自分じゃないっす！」
「合法的に戦闘から逃れられたけどイフリート伍長に八つ当たりされるし襲われるし散々っすー!!」
「だーかーらーなんで自分達は縛られてるでありますかー!!」
「うふふ。明日からは、配膳のミスで何かが入ったのかもしれませんので気をつけないといけないですね」
マジかよ、そこまでするか。
晩飯の配膳の時に、アクアが水をこぼしてやたらと、過剰な具合に謝ってきていたが、もしかして実行犯は（リーゼに脅された）彼女か？　よくよく思い返してみれば、顔色が青いしいささか挙動不審だった気もする。
「それで、ブラナッハさんはどなたでしょう？」
「自分じゃないっす！」
「自分でもないっす！」
「自分も違うっす！」
「私はモジュールがあるので確定で違うっす！」
「あー！　戦闘能力があるんだから自分達を救えっすー！」
「へるぷみー！」
「みすてるのはんたーい！」
ずばぁん！
私の足元に向けて、リリスがマテバのトリガーを引きやがった!?
「うるさいですねえ……素直に誰がブラナッハさんなのか白状してくれませんか？　出ないと私、引き金を思わず引いてしまいそうです」
「いや、今引いたっすよね？」

「引いたっす引いたっす」
「死にたくないっすぅー！」
「ああ、安心してください、暴徒鎮圧用ゴム弾なので痛いだけです、死にませんよ？」
　それは死ぬほど痛いけど死ねないの間違いじゃないですかねえ……。
「……」
　と、それまでずっと無言だったソワンがふっと進み出ると抜刀というか抜包丁して、私の首筋にぴたりと当てた。よりにもよって私に！
　鉄虫相手にも使うあの包丁を！
「あなたですわね……ブラナッハさんは」
「ち、違うっす、ちがうっすよぉ……」
「いいえ、あなたですわ……元がブラウニーだからでしょうか、ブラウニーの演技がとてもお上手ですわね、わたくしでも見分けがつきませんわ……でもあなた、以前わたくしが厨房の手伝いをさせようとしたら、喫煙者が厨房に入っていいのか、と断ったでしょう……？」
　げっ
　ソワンは、顔を近づけ私の首筋の匂いをすんすんと嗅ぐ。
「タバコの匂いがしますわ……」
　ジャキッ
　ガシャッ
　次の瞬間、私の頭にマテバ、首筋逆側にリーゼのハサミが押し当てられる。二人とも表情がクソ冷たくて怖い！
　つーかまあ、縛られていた段階で詰んでいたと言えなくもない。
「はぁ……わかったわかった、協力させてもらうよ、力になれるかどうかはわからんけど」
「わからないじゃなくてなるのよ害虫！」
　こわっ!?
「いや、そうじゃなくてね、あー、もー……とりあえず話しにくいからコレ解いてくれない？　他の３人も解いてあげて？」

■　◇　■

縄を解かれたブラウニー達は、ものの２０秒ぐらいで逃げ去っていった。
「ブラナッハのことは忘れないっすよぉー!!」
とか言い残して。縁起でもねえ!!
「はぁ……まあ、さっきも言ったけれど。謙遜とか言い逃れとかそういうの関係なく、私の助力なんてあなた達にはいらんのよ」
改めてソワンが淹れてくれた紅茶を４人で囲みつつ、私は３人にそう告げた。
「どういう意味でしょうか？」
「今から説明する。基本的にあなた達は単品では……完全にとは言わないが、少なくとも司令官にとってはなんら問題がない。むしろ好ましい部類に入ると思ってる」
「でも……ご主人様は私を寝室に呼んではくれないわ……」
「そりゃそうだ。司令官への執着が確かに目立つかもしれないが、あなた割りと、メイと一緒で随分と乙女趣味というかなんというか。まあともかく、普段の落ち着いている時のあなたを見ていればそれぐらいわかる。で、私たちの個人個人を大事にしてくれる司令官が、その辺りのことを無視してベッドに呼ぶと思う？」
興奮状態が去って、落ち着いてきたのか沈んだ声で言うリーゼに私はストレートにそう告げる。
「……」
……無言で照れるんじゃありませんよリーゼ。
「では、私は？」
「あなたは純粋にタイミングがないだけ。警護隊長なんてしてるから普段から近くにいるけど、その分こういう潜航移動中でもない限り気が抜けないし、仕事中に逢引の約束を持ち出せないぐらいには真面目だし……コンパニオンシリーズの姉妹の面倒を見ているから余計に時間がない」
「む、むぅ……」

言い淀むリリス。
「では、わたくしは？」
「……あー、すまん、あなたならちょっとは助言ができるかも。あなたは譲歩という名の協調性を覚えて。オルカの乗船人数がまだ少ない今ならまだしも、今後ずっと司令官を独占なんてできるわけがない。特に、あなたじゃないソワンが今後何十人とやってくるだろうしね。嫌な言い方だけど、その中に譲歩ができて協調性の高いソワンがいないとも限らないでしょ？　おうそこでナイフ出すのはやめーや」
「ですが……厨房を私以外に任せるなんて考えると、絶望に沈みそうですわ……」
「分担しろよ……あなたはシェフ。世の中には他にもパティシエだのバーテンダーだのバリスタだの板前だの色々いるじゃない」
「……」
完全に納得はできないだろうが、とりあえずソワンは黙った。
「あと」
ここからが本題である。
「あなた達には1つ、ものすごく大きな問題がある」
3人に視線で促されて、続きを語ろう。
「お互いに足引っ張るんじゃないよ」
「……は？」
「この間、唆されたのもあるが抜け駆けしようとして水着をカットしちゃったな？　リーゼ。リリスはリリスでオードリー・ドリームウィーバーに一服盛ろうとしてたし、そもそもリーゼを唆したのはソワンで一服盛る薬剤の出所もソワン」
一拍おいて続ける。
「ぶっちゃけ、あなた達が互いに足引っ張りあったりしなければ、余裕で全員司令官に抱かれる余裕はあったと思うぞ。足の引っ張り合いしなければ！」
自覚があるのかなんなのか、反論は飛んでこない。
「そんで？　私が協力してどーにかしろと？　まーネオディムは私と司令官が両方大ポカやらかした結果だけど、メイはちゃんとメイ自身

が努力した結果だぞ？　というか、お前ら私が司令官に何か言って、それが理由で司令官に抱かれるとかなんとも思わないわけ？」
「……ぐうの音も出ませんね。ですが、その場合私達はどうすればいいのでしょう？　このままではまた足を引っ張り合い、膠着している間にまたネオディムやメイのような輩が出てくるのは判り切っています」
「……頭のいいあなた達が気づかないとは思えないから、認められないだけだと思うがなー。積極策で言うなら共同戦線。３人で連れ立って司令官の部屋に夜に突撃してこい。もちろん穏やかにな、穏やかに。あるいは日中にアポ取っとけ。それが無理だって言うのなら、消極策……この場合は非戦条約だな。全員が一回以上抱かれるまで、お互いがお互いのやることに口や手を出さない。どれだけお互いが気に食わなくても。……と言っても、３人の中で自分以外が司令官のところに行く、とかそう考えたぐらいで腑が煮え繰り返るんでしょ？」
　おう、３人とも別ベクトルで顔がこえーよ。
「……ああもうめんどくせえ、このまま、ついていってやるから、このまま司令官の部屋に突撃でもして抱いてとか言ってこい。なんだっけな、伝説のあった日本の言い回しで、昼間は淑女、夜は娼婦のように、なんてものがあったんだよ。男の理想像みたいな触れ込みでな。……歌謡曲だっけか……？　まあいいや」
　紅茶を一口。頬杖ついて、ジト目を向けながら私は問いかける。
「で、行くの？　行かないの？」

■　◇　■

「いやほんと、いい歳……いい外見年齢したバイオロイドが雁首揃えて司令官の部屋に行くことすらできないって、幼体固定バイオロイドですか全く……」
「お前はそう言うけどね……！　こ、こんな時間にご主人様のところに押しかけるなんて……！」

「……今日だけはその乙女思考は封印しておきなリーゼ……」
「ですが……わたくしも、司令官様の所に抱いてくれと言いに行くのも、その、ハードルが高いですわ……」
「つーても、そういう恥じらいも割と賞味期限近いんじゃないかな」
「？」
　また3人の視線がこちらを向く。
「今はいな……あー、いるか？　まあ、そう言うのに積極的なのは今でも一応バトルメイドプロジェクトの子にいるわけだからさ。そのうち、人類再興も兼ねて毎日3人もか4人ずつ抱く時が来るとしたら、もはや埋没するわけだよ。だから、早めに手を出しておいてもらう、というのも大事なんじゃないか、ってね」
「……すでに抱かれた事がある側としての余裕ですか？」
「そんなんじゃないよ」
　話しつつ、最後の角を曲がり、司令官から（肉体関係持ちにいつでも来ていいと）配布されているセキュリティカードを通して艦長室のドアを開ける。やべ、何そのカード、って視線が後ろから三つ。
「司令官、いきなりですみません、少しお話とお願いが……」
「ごしゅじんさまあああああああぁぁぁぁぁぁぁぁ……」
「？」
　あろうことか。
　艦長室の休憩、応接、談話スペースのソファの上で、司令官に対面座位の形でしがみついているのは……なんとアクア。くっついているだけかと思ったら、部屋に篭る独特の匂いに、2人の混合体液でデロデロの股間が見える（「バイオロイドってマ●汁すげぇんだぜ！」のセリフが頭をよぎる。もしかして私もか？）
　くったりしている辺り、ちょうどフィニッシュ？
　……なんて少しだが思考があらぬ方向を彷徨ったのがいけなかった。
　ずばぁん！
　リリスがノーウェイトでマテバをぶっ放しやがった！　言を信じるならゴム弾のはずだが、アクアの髪の毛をいくらか引きちぎると、

向かいの壁に傷をつける。
「あくあああああああああああああ!!」
激昂したリーゼが突進し、ソワンもそれに追従しようとした……よう、だが……
お前らもしかして気づいてない？
やべえ、司令官様、多分激おこ……
「お前ら全員止まれ」
ぴたりと、私含めて、４人全員が動きを止めた。
「ブラナッハ、ドアを閉めて鍵をかけてコンソールの電源を落とせ」
「はい！」
無論、我が身可愛さに従うのみである。

■　◇　■

ガクガク震えながらアクアと抱き合って目の前の惨劇から目を逸らしつつ、現実逃避していたところを新手の悲鳴に呼び戻される。
そんなことを繰り返した忌まわしき夜が明けて、気がついたら全裸で白濁塗れの３人（シザーズごめんなさいマシーンリーゼ、ブラックもうしわけありませんマシーンリリス、ソワン・ザおゆるしくださいマシーン）がイきくたばっており、司令官は司令官で彼のベッドで寝息を立てていた。とても目の前の惨劇を作った張本人とは思えない。
が、現実は現実である……。
私のせいか？　ゲームで見た司令官とはこういうところで性格が違うなあ。
ところで、なんでアクアが？　と言うことについては、アクアの話ではリーゼに脅されて一服盛ってしまった事について自首しに来たところ泣いてしまい、慰められているうちにいつの間にか、だそうである。本人曰くネオディムから聞いて色々と知った所に抱きしめられて慰められてで抑えが効かなくなったということだが……私の司令官への好感度は少なくとも半減である。
いや、リーゼ達が私に何かするつもりだって知ってたのなら助けて

欲しかったよ……。

レアに付きまとわれてそれからの話

さて。

あれから、ちょっとしたいたずらをしている。

どういうものかというと、司令官とアクア、あとあの3人に怒ってますよというポーズをして対応を素っ気なくすることである。

アクアにだけは、本当に怒っているわけではなく、司令官が助けに来なかったことに対してのお返しであるので気にしなくていい、司令官の様子が見てられないようであればばらしても構わない、と伝えてある。特定ワード（ブラナッハ様最高！）を言ってくれればやめるとも言ってあるのだが、司令官がそのワードを言ってくるような様子が無いのでアクアは黙っていてくれているのだろう。

司令官を含む4人が謝ろうとしてか何かはわからないが、そんな感じで近づいてきた場合はさっとその場を去るか、方針会議などで去れない場合は後にしてくれとだけ素っ気なく。

オロオロしている4人が愉快である。この間の報いを受けるがいい。

■　◇　■

さてさて。

「ですからー、相談に乗ってくださいよー」

「いや、無理だって、司令官に話したほうが……」

「その司令官からのご推薦なんですよ？」

オベロニア・レアに今現在付き纏われている。

なんと、つい先日このオベロニア・レアと、あろうことかティタニア・フロストが二人セットでこのオルカにやってきたのである。ゲームとしての実装時期は随分と離れていたが、この2人の開発時期は非常に近く、それもあってオベロンとティターニアのがモデルであるこの2人は、フェアリーシリーズの中でも双子に近い扱いだったと記憶している。が、ティタニアは失敗作とされ、意図的に性格を陰気かつ

剣呑なものにされており、極端な言い方をするとにくすべ勢。
とはいえ、性能が本当に失敗作と言えるかと言うと否。レアのような戦略兵器級の性能を期待していたとしたら、確かにそうだが、レアとアリスのように相互確証破壊を成立させてしまうと逆に出撃できなかっただろうから、これでいいのでは？　と思わなくもない。
そんなティタニアをレアは構い倒していたようだが、当然ウザがられてついには逃げられ、どうにかして仲を逃げられないレベルまで持って行けないか、という相談を持ちかけられて今に至る（構いたがりの姉を名乗る存在と、陰気かつ剣呑で素直じゃない妹、というとどこかで見た気もする）が、んなもん根気よくアプローチを続けて心を開いてくれるのを待つ以外無かろう、というのが私の結論だ。そういうことであれば、私やレアよりも司令官のほうが適任である。
そういえば、酒を飲ませればいくらか素直になったような気もするが、それとてそれまで積み重ねた信頼、好感度があってこそ。下手に急げば失望させるだけだし、何よりお酒は司令官とこういう条件では致命的に相性が悪く、９９以下ではいかにマジ●ンがあろうとも無理にコマしてもは０になって憎悪を募らせるだけである。
「あのねえ。だから、急いだって碌なことにならないって。根気よく話しかけ続けて、心を開いてくれるのを待つしかないってば」
レアにも根気よく諭し続けるしかないのだろうか……？
そんなことを考えていた時だ。
「あ、いたー!!」
「？」
後ろから掛けられた声に振り向いてみれば、向こうからトリアイナが走り寄ってくる。
ただし、いつもの競泳水着風の格好ではなく、バニーガール姿の。
そう、ただいま満月の夜想曲の真っ最中である。最初にモモが探索をしたいと言って実行し始めてから、しばらくは空振りが続いたと記憶していたが……まあ、ティタニア・フロストが既にいる辺り、私の記憶もそろそろ当てにならないのかもしれない。
「何か用？」

ともあれ、トリアイナだ。バニー姿でこっちに来るということは、もう白兎は見つかって、アプローチに一度失敗したとかなのだろうか？

「何かじゃないよ、ブラナッハも次の探索交渉チーム入りしてるんだよ！　招集がかかってるのにこの隊長のところに来ないとはどういう了見さ!?」

「？」

確かに、本当に招集が掛かっていたのなら一大事だが、私は今日は休暇である。昨日にその白兎の探索のために、チャリオットであっちこっち移動したからだ。無論、緊急招集も無いわけではないので通信端末は携帯している。そちらを取り出してログを見てみたが、招集が来たログは無い。

「招集ログは無いけど？」

「昨日ポストに入れたじゃないか！」

「……なんでポスト？　電子連絡にしてよ、使ってる方が稀なやつじゃん……」

「そこはロマンだよ！」

笑顔で言い切るトリアイナ。こいつ悩み少なそうだな顔してんなぁ……なんて私の内心も知らず、トリアイナは私の腕を掴むと、

「ほら、ぼさっとしてないで、それじゃブリーフィングして出発だよ！」

と、走り出そうとする。まあそうなると当然、

「ちょっと待ってください、こっちが先約ですよ!?」

レアが止めに入るわけだ。

「え、レア、でも今日、白兎が捕捉できたから、探索から追跡と仲間になってくれるように交渉するのに変わったんだよ？」

用が何か知らないけどこっち優先じゃない？」

「む、むぅ、それは確かに……わかりました、それじゃあ私も同行します！」

「部下が増えたよ、やったね！　あ、でも、レアは大丈夫かな？」

「というと？」

「白兎が頑固だから、みんなも魔法少女になろう、ってことになったんだ。でも、レアって少女って歳じゃないじゃん」
「……」
「魔法少女っていうより……魔法淑女？　魔法大学生？」
「……」
「落ち着け、トリアイナに悪意はないし貶してもいない」
　静電気が俄に辺りに充満し始めているが、トリアイナはそれに気づかず、地雷原でタップダンスを踊り始める。
「ていうか、レアってどっちかっていうとおばむぐっ!?」
「やめろ!?　それ以上を口にするんじゃあない!?　うぉわっ!?」
　足元でバチッと青白いものが弾けた。
「トリアイナさん？」
　にっこり笑顔だが目が笑ってねぇ……。
「落ち着け、落ち着けレア、びーくーるびーくーる……トリアイナみたいな外見年齢世代からすると、２０代は須く相当の年上に見えるもんだ、私も含めてな？」
「がるるるるる」
　……ふざけてくれるということは、それなりに落ち着いてくれているのだろうか？
「はあ……トリアイナさん、後でお説教です、逃げないように」
「はひ！　あ、でもブラナッハはどっちかっていうと年下に感じ」
「お前もう喋んな」

■　◇　■

「なんで私まで……」
　ぼやく私の姿はバニースーツ。
　あれからトリアイナに連れられて執務室まで訪れれば、流れるようにオードリー・ドリームウィーバーに引き渡され、あれよあれよという間に採寸が始まり気がつけば私はバニーガールコスチュームを身に纏っていた。

『グッド。機能性が高い、という理由でいつもあのビスマルク製作業ツナギを好んでいるのは存じていますが、それはそれとしてあのような洒落っ気の欠片もない衣装は認められませんわ』

というのが当のオードリー・ドリームウィーバーのコメント。

あまつさえ、魔法少女らしくない、という理由で今回の探索ではチャリオットの使用を禁止されたため、エアボード（ドクターによる出力・強度の魔改造済み品。某何とかセブン的な機動力を出せる。そうだよ私はギドンヒョンだよ）での出撃である。いつものＦ２０６０ＡＲではバランスが取りにくいため、どこで見つけたかも忘れたハンドヘルドタイプのチャージ式ブラスターと、チタンカタナを引っ張り出してきた。

……ん？　もしかして私が呼ばれた理由コレ？　確かに普段からチタンカタナは使ってるからなあ……。

なんてことを考えつつ、遭遇した鉄虫をバッサリ、あるいはブラスターで吹き飛ばしながら、森の中をエアボードで駆け抜ける。樹上に上がってしまうと、枝葉で下が見えなくなってしまうので高度を上げられない。

隣にはレアも並走している。天候操作マイクロボットだといささか破壊範囲が大きすぎるので、話し合って樹木保護も兼ねてとりあえず私が少数であれば即切り倒し、それが不可能な大群と遭遇したら雷を落としてもらうことにしていた。

……ていうかレアのバニースーツサイズあってなくね？　ていうか名札を止めてる安全ピン、もしかしなくても乳首貫通してない？　大丈夫？　私すごく心配……。

ともかく、次第に撃破された鉄虫の残骸やら、マジカルピンクムーンライトの余波と思われる木々への抉れたような痕やらが増えてきたので、白兎も近い……と思いきや。どうやらココ最近の白兎の活動経路を逆走していたらしく、

「これは……最近までここにいましたが、鉄虫に嗅ぎつけられたので移動した、という感じですね……」

レアの言う通り、放棄された白兎の拠点らしきものが見つかった。

ほぼ同時に、モモ達が白兎に接触したという通信が入る。
「……戻りますか」
「……戻りましょうか」
双方の結論である。
ただ、戻る前に残された物資などがあれば回収していこう、ということで家探しをしていたところ……
「あのぅ……」
「おや、ポックル大魔王」
「ひぇ、わ、私のことをご存知なんですか……？」
そう。ひょこっとポックル大魔王がやってきたのである。

「そ、そうなんですよ白兎ったら酷くて、わかってくれますか……？」
殺意を持って自分を追いかけ回してくる相手がいる、という状況のストレスやいかんばかりか、という様子で、オルカに連れていく間もポックルの愚痴の嵐。レアが呆れた顔をしているのも無理もない。
さて、オルカに連れて行くにあたって、白兎と鉢合わせしては元も子もないので、この辺はまずは連絡を取らねばなるまい。
「モモ、ちょっと相談があるんだけど、今大丈夫？」
『ブラナッハさん？　はい、大丈夫ですよ、どうしましたか？』
「うん、まず、近くに白兎がいるなら聞かれないようにしてほしい」
『あ、はい、マジックジェントルマンに挨拶してませんものね。出力を切り替えるのでちょっとまってくださいね……はい、大丈夫です』
この辺、さっと察してくれるあたり、モモは本当に頭がいいのだなあ、と思う。
「オッケーありがと。というのも、ポックル大魔王を保護してオルカに連れて行ってるところだから、白兎と鉢合わせさせたくなくてね」
『あ、そういうことでしたか。私達はあと１０分ぐらいで着きますから、お願いしますね』
「りょーかい」
後は、時折位置情報を送ってくれるので、それを見ながら鉢合わせしないようにポックルを司令官のところへ連れて行ってミッション

コンプリートである。
とはいえ、白兎がポックルの命を狙っている状況は変わっていないのでどうしたものか、という問題は残っている。
一旦別室に隠れ、白兎が司令官と話をして今度はポックルを探しにモモたちと出撃するのを待ち、司令官と合流して話し合うも、結局良い案は出てこない。
元にもあった、ポックルの角による洗脳は一時的なものだし知能に悪い影響があるということで却下。
当然、ドクター発案の記憶をいじっちゃおう、はネオディムの大反対により却下。
「どうしたものかな……」
司令官のつぶやきは、全員の内心を代弁するものであった。
結局、死んだと思わせることは、今後ポックルがオルカに同行できなくなるため使えない。かと言って白兎を説得するのは難易度ルナティックであることがポックル自身によって証明済みである。
正直、私はめんどくさくなってきており、ここまで元の通りであるならば、これからもそのようにしてしまえば良いのではないか？　と思えてきて、モモだったかの手柄を横取りしてしまおうかと考えていたところ、
『ブラナッハさん』
「んお？」
そのモモからの通信である。
『白兎ちゃんが、急に、「ポックル大魔王の気配がする！」とか言い出してオルカに戻っていったんです！』
「マジかよ!?」
おどれはポックル探知機か何かか!?　と悪態を付く間もなく、
『通してください！　ポックル大魔王の悪しき魔力の気配がします！』
いきなりの入室はさすがにコンスタンツァかだれかが止めたのか、ロックが解除されていないドアがガコッと音を立てる。
『白兎さん、いきなりはいけませんよ？　今ロックを解除しますから、

少しお待ち下さいね』
そして猶予はなくなった。
ので、ポックルの手を引いて司令官の机の下へ強引に押し込み、元の位置に戻るにももう時間がないのでそのまま私も机の下に潜り込む。
「ちょ、ブラナッハ!?」
もうこのまま原作の流れになーあれ、と思っていたのだが……
「……」
「あ、あの……こ、こちらの知らない方はどなたですか……?」
机の下にいたのは、共振のアレクサンドラではなく、ブラックリリスだった……。

……結局、あの後の流れは原作とそう変わりはない。
めんどくさくなった私が、偽装捕縛からの改心コースを提案し……たところ、濡れ場を邪魔されて怒り心頭だったらしきブラックリリスがその場でポックルを椅子に縛り付けてマテバを突きつけたのである。
そこへ、ジャミング不可能なポックル探知機と化した白兎が乗り込んできて、一方ガチ泣きしたポックルが白兎へ助けを求め。それまでのモモ達による説得＋キレたブラックリリスによる暴力＋ガチ泣きして助けを求めるポックルの姿によるあわせ技で、なんとか白兎にもポックルがすでに敵対する存在ではないことをようやく理解できたらしい。
手間を掛けさせるものである……というかキレたリリスこえー……。
まあ、白兎関連の騒ぎが終わったわけだし、後は日常の資源回収任務にでも明日から出るか。

■　◇　■

……などと、ぼんやり考えつつ、その日の晩御飯を終えて、部屋に

戻ろうと通路を歩いていたところ、不意にくらっときた。
待て、今日は配膳のアクアもダフネも、怪しい素振りは一切なかったぞ……？
「いいえ。今日はわたくしですわ。わたくしがあなたの食事だけに薬を仕込んだのですわ」
「……そ、そわ……？」
この短時間で呂律すら回らないとは相当強力な薬を仕込んでくれたらしい、ソワンだった。
「ええ、わたくしですわ。あなたのせいで、ご主人様にお仕置きされて躾けられたソワンですわ……」
のろのろとしか動かない身体を動かして、見上げてみれば、うっすらと笑みを浮かべながらこちらを見下ろしている。
「お、おま、うぇ……」
「強力な弛緩剤ですが、バイオロイドであればしばらく動けないだけで済みますわ。そして、こちらの用事はそれだけの時間があれば十分」
そのまま、両腕を捕まれ、ずるずると廊下を、不自然に誰もいない廊下を引きずられる。
やばい、殺される……
と、思ったものの、引きずられていく先は、廃棄物処理区画ではなく、居住区画。もっと端的に言うと、司令官の部屋だった。
「うぇ……？」
私の疑問のうめき声にも何も反応せず、ソワンは私を司令官のベッドに寝かせると、離れていった。ドアの音がしなかったので、室内にはいるらしいが……。
「ブラナッハ」
のろのろと声の方を向けば、どうにも「おこ」な様子の司令官。その後ろに壁際には、例のヤンデレ三人衆が壁際に控えている。
「アクアから聞いたぞ。別に怒っているわけではなくて、単に仕返しと面白いからやっていた、とな」
……あっ。もしかしなくてもこれは最悪のバレ方をしましたね？

「お前にもお仕置きが必要なようだな？」
ちょ、八つ当たりックスの二度目はご勘弁願いたいんですけどねえ!?
ジィィィィ、と音を立てて、まだ着ていたバニーの背中のファスナーが降ろされる。
……その後のことは、よく覚えていない。

テイタニアが相談を持ちかけてきた話

さて……なんかこの導入多い気がするな。
あれから、資源回収やら出撃やらの任務の終わり際とか、あるいは非番でオルカ艦内を歩いている時に、不意に司令官に物陰に引きずり込まれることが増えた。精神年齢が幼い組は巧みに隔離されているようだが、言い換えればそれ以外は別に隔離されていないということである。物陰を覗き込まれれば当然見えるし、無音無臭でもない。
いや、確かに、最初に半分いたずらで仕返しを仕掛けた私も悪いが、コレはちょっとやりすぎではないのか……？
なんて内容をアルマン枢機卿に愚痴ったところ、
「陛下は……ある意味、あなたに甘えてらっしゃるのですよ。羨ましいことに」
「……は？」
いや、私に？　前世持ちを公言していて（そのせいかＬＲＬが時折仲間を見る目を向けてくる）、母性なんぞ欠片もない私に？
「ご存知ですか？　人間様としての感覚をお持ちなのは、陛下とあなただけです」
「……う、うん？」
「良きにせよ悪きにせよ、あなたを除くバイオロイドは、バイオロイドとしてしか陛下に接することができません。……一部、子供みたいなのもいますが、根底の部分は変わりません」
真面目くさった顔で、アルマンは私に言う。
「普段はどうにもこうにも上下関係を意識せざるを得ない陛下が、バイオロイド出現前の人類同士の接し方をするため上下関係がない……とは言いませんが意識しなければいけない度合いがまるで違うので、接するのが気楽なのだそうです」
「そうですって、司令官がそんなこと言ってたの？」
「はい。この間、ブラナッハさんへの扱いがひどいのではないか、と談判したことがありまして」
「おお、素晴らしい」

「『俺がやられたんだ、怒ってるふりしてもいいだろう？』とのことでした」
「あー……」
乾いた笑いしか出ない。
「けど、発端は、あの3人から助けてくれなかったことへの抗議だよ？」
「その場合は『やられたらやり返す、倍返しだ！』とのことでした。回り込まれてますよ？」
クスクスとアルマンが笑う。とりあえず、自分は苦虫を噛み潰したような顔をしていることだろう。
「銀行員のドラマなんだけどなそれ……よくアーカイブ見つけたね？」
「後は……『あそこまでされて悦ぶドMは今の所ブラナッハだけだから』ともおっしゃってましたね」
「嘘だッ!!」

■　◇　■

嘘だと言ってよ白兎（バニー）ちゃん……。
我ながらボケにもキレがない。
うっそだあ、私ドMなんかじゃないやい、と抗議したものの、アルマンからは「何を言っているのでしょうか、この方は」という視線を向けられ、通りがかったナイトエンジェルに意見を求めてみたところ、同様の視線を向けられるだけに終わった。
え、嘘、私ブラックリリスよりMなの……？
若干、いや、かなりのショックを受けつつも、なんかもうふて寝するしか、と考え自室……先日も述べたとおり、他にブラウニー3人と同室なのだが、そのドアを開けた瞬間、私に向かって手が伸びてきた。
「うぉっ!?」
とっさに回避を試みるも、素早く伸びてきた手は私の胸ぐらを掴むと部屋内部へと引き込み転がし、慌てて逃げようとした私の目の前で

ドアが凍結して開かなくなる。
凍結？
下手人が司令官ではない事に気づいた私が、私を引きずり込んだ手の持ち主を見上げてみれば。
「……ティタニア？」
そう、ティタニア・フロストがいた。

「あー、とりあえずコーヒー淹れたよ」
「……感謝する」
ティタニアと、私の前にコーヒーを置く。
なんでも……というよりは、案の定というべきか、ティタニアは私に相談事があるそうな。最近の司令官の私への接し方に、とばっちりを恐れて他のブラウニー3人は地味にこの部屋に寄り付かなくなっている。出くわした時に尋ねてみると、イフリートがやっていたようなダクト内で寝ているとか、あるいはレプリコンの部屋に転がり込むとかしているらしい。ともかく、そういう意味で人が来ないスポットとなっているので、相談事には丁度いいだろう。
……今現在物理的に出入りできないのもあるけど。
「それで、相談って？　ああ……何となく分かるけど」
「……」
コーヒーを何故か恐る恐る、といった様子でちびちびと飲むティタニアに何か微笑ましいものを感じつつ、この間のレアの様子から内容は自ずと想像がつく。
「レアがうざい」
「レアが構いすぎ」
うむ、合ってた。
しかし、わかっていたことだが、難しい問題でもある。
同じオルカ艦内で生活し、時に出撃するわけだから、完全な没交渉は不可能だからだ。
そのような点を踏まえ、完全没交渉は現実的に不可能と伝えた上で、どのような落とし所を望んでいるのかを聞いてみた。

「……。……？」
……考えていなかったようだ。
まあよくある。問題をどうにかしたい、という意識だけが先行していて、問題をどう解決したいのかという観点そのものが欠けていることは。イフリートみたいに何も考えずにとりあえず『埋められたくないんだけどどうすればいいかな？』なんて持ち込んでくるドアホもいるが。お前は真面目に任務をやれ。話はそれからだ。
「とりあえず……」
「……？」
「とりあえず、さっきも言ったとおり、完全没交渉は無理。仮に今いるレアに納得させたとしても、これから来るレアに、あるいはこれから来るティタニアにも納得させるのは絶対に無理。つまり、双方の主張が完全に通ることはないから、逆を言えば双方に妥協してもらわなきゃいけない」
「……」
「パッと思いつくところだと、ティタニアはある程度の干渉は受け入れる、具体的に言うと完全に邪険にするのではなくて話ぐらいは多少応じるようにする。逆にレアは、その多少の話で我慢してもらう。ティタニアはティタニア、確かにフェアリーシリーズではあるのだけれど、戦闘能力メインで確か家政能力はまるでなかったよね？　そういう差異がある以上部署も別けるべき……私みたいな個人部隊とか」
「……」
「どう？」
「……理解はした。レアを避けきれないことも理解した。だが、今の話をどうやってレアに飲ませるつもりだ？」
「そこなんだよなあ……」
そう、問題はそこである。
相当、ティタニアについて執着があるようで、あるいは家族だからと言って聞かないらしい。
「まあ、私がレアに根気強く説得するしか無い、かなあ……」
あるいは、司令官に相談するかぐらいだろうか……。

と、ぼんやり考えたその時だ。
ガコォン！
「うわっ!?」
「……？」
突如発生した大きな金属音に、そちらを振り向いてみれば、床にダクトのフタが落ちている。
「よいしょ」
そして、そのフタの外れた天井ダクトから、ダッチガールが降りてきた。
「……え、ダッチガール？　なんでそんなところから？」
思わず問いかけた私に、彼女はぴっと氷漬けの入口ドアを指差し。
「開かないって連絡が来たから、氷を粉砕しにきた」
「あー……」
言われてみればそうである。
ティタニアも、氷漬けにする能力はあったとしても、逆に解凍する能力は持っていなかろう。つまり、単に鍵をかけたぐらいの感覚だったが、うっかりと言うべきか私達はここに閉じ込められていたのである。
ギャリギャリギャリと音を立てて掘削用ドリルが氷を削る。本来、土や岩盤の掘削の時は冷却が必要だが、そもそも氷が掘削対象であるので、削る端から冷却されていっているようでドリルを追加で冷却したり、一時休止する必要がないらしい。
瞬く間に氷に埋まっていたドアが掘り出され、ドリルで削るまでもないような場所はガンガンと叩いて壊し、最後は力技でドアをスライドさせて氷漬けの戸は開通した。
「ティタニア、コンスタンツァから伝言。オルカ艦内では、危急の場合を除いて何かを氷漬けにするのは禁止だって」
「わかった」
外側からも削ったりしていたらしく、外にもダッチガールがいて。開通したドアを境に、二人はハイタッチをして帰っていく。
「……。……まあ、レアに話をしに行こうか」

こくり、と頷いたティタニアを伴って、部屋を出る……いや、出ようとした瞬間、
がっ
「い!?」
不本意ながら最近馴染みの不意打ちの感覚。
掴まれた方、左を見ればニヤッとした顔の司令官がいる。そのまま私を、私達の部屋に押し込もうと、いや、待って、そこには、ティタニアが、ティタニアがいる……！
ま、まって!?

■　◇　■

「なるほど。確かにそれはレアの干渉が過ぎるな……過干渉と言っていい。わかった、そこは聞かせてもらったブラナッハの案で行こう。先にティタニアが譲歩した以上、レアにも譲歩させる。それでも問題が発生するようなら、いつでも俺に相談しにきてくれ」
「感謝する」
「……」
……。
「……ところで」
「ん？」
「ブラナッハがぴくりとも動かなくなっている」
「ああ、大丈夫大丈夫、あれで存外、悦んでるタイプなんだ、ブラナッハは」
「あの激しい性行為でにわかには信じがたいが……」
「おう。ドドドドドMだからな、ブラナッハは」
「それは、今のブラナッハを見れば納得できる」
「とりあえず、レアを呼んで話そう。俺も同席するから、変な暴走とかはないだろうさ」
そんな話をしながら服を着た司令官は、ずっと見ていたティタニアを伴って私達の部屋から出ていった。

嘘、でしょ……？

アリスに愚痴られた話

「ヒャーーッ、ハーーーッ！」
　叫んで、景気よくチャリオットのミサイル全てとＦ２０６０ＡＲのマガジン1個分をぶっ放す。
　それらは文字通り群れで立ち塞がる鉄虫どもに着弾して、爆発と破片を巻き散らかした。
　そう、レモネードアルファもドン引きの、鉄虫が占拠している鉱山に襲撃をぶち込み資源を取れるだけ取って離脱する文字通りの略奪行為、通称永遠の戦場である。
　今回ターゲットにした鉱山は、まあそれなりにまだ警備が緩い方で、あのクソ赤ボンバー等のいない、平和なところだ。
　ところで。
　私も含めた皆が使っている弾薬やらの出どころはどこなのか、と言う話である。
　ゲーム状はその辺りは簡略化されて、部品、栄養、電力の3項目になっていたが、現実となるとそうもいかない。私が市街地廃墟とか軍事施設廃墟とかを巡って集めてきた資源からの再生品とか、ダッチガールたちが新たに採掘して得られた資源から作成したり、などである。
　おわかりいただけるだろうか。
　つまるところ、私達の血と汗の結晶なのである。
　それを、
「ああもう、ゴミどもがうるさいわね！　いいわ、やってあげようじゃない！『石器時代へ！』」
「……お静かに！」
「ソーフィッシュが壊れたぁー!!」
　ちゅどーんどかーんばがーんずどどどどどどどどど
　とまあ、実に気軽に重爆撃級の攻撃を、単体とか少数の敵にすらぶっ放しまくっているわけだ。
　アンドバリが泣くぞ……というか泣いてた。

トリアイナ、予備のソーフィッシュはもうないから一旦撤退してフォーチュンとかグレムリンに怒られてこい。つーか余計な突撃すんなって言ったばっかりなのになんで突っ込んで機体壊して帰ってくるわけ？

「ふふふっ……司令官とデート、デートっ！」

「モモ、マジックジェントルマンとの第３の儀式に挑むのですか？むぅ、私とは第２の儀式もしてくれないのに、どうしてですか？」

「今回の功労トップには、何でも一つお願い事を聞いてもらえるそうですからね。頑張らなきゃ！」

可愛く言っているが、もともとが子供向けスプラッター魔法少女ドラマ番組（すげー言葉だ……）出身のコイツラの武器は、多分にスプラッターが過ぎることがある。まさに今で、返り血というか返りオイルというか、なんか赤黒いものがモモの顔についていたりする。

「はわわわ……しゃ、社長～、なんてことをモモさん達に……」

そして殺る気もといやる気爆上げなバイオロイド連中と、やる気と比例して跳ね上がる消費資源量。

さっきも述べたがアンドバリがガチ泣きしてたので、こちらもスカベンジングの回数増やすから、と慰めておいた。

「チェストー！」

「発射ー！」

「おらおらーっす！」

「分隊長！　こいつらいくら撃っても倒れないっす！」

!?

「だ、だからお前らそいつらは、周りのか弱い生き物じゃなくて最初に指揮個体をたたけってブリーフィングで口酸っぱくして言ったじゃん!?　もう忘れたのかお前ら!?」

「あ、うっかりしてたっすー」

「てへぺろ」

「おっとー」

「……ごまかしてるところアレだがな、あのアングリータイプのチックコマンダーは……」

ズドドドドドドドドド
そう、もはや手がつけられない。
「ギャーッ!?　い、痛いっす痛いっすー!!」
「退避!　退避ーっ!!　ああもう、つーかもう無理!　マジで無理!
ティタニアー!　もう丸ごと全部凍結させて!　もう無理!」
「……了解した」
慌ててノームの作ったコンクリート掩体の影に隠れるものの、あっという間に削られていく。
援護も間に合いそうにないので、慌てて同行してもらっていたティタニアをけしかけて全てを凍結させる。
攻撃範囲の都合上、一部の味方（ブラウニー共と私）が巻き込まれたが、こらてらるこらてらる……。

■　◇　■

無論、怒られた。
めっちゃ怒られた。
主犯はブラウニー達と主張したのだが、こちらの管理不行き届きであるとされた。解せぬ。凍りついたところを、トリアイナとかランバージェーンに切り出されて救助されるとかの手間を増やしたからか？　あるいはメイとかの弾薬浪費を抑えきれなかった責任問題か？　わたしゃ指揮官級じゃないんですけど？　やっぱ解せぬ。
怒られすぎて腰がガクガクで物凄く歩きづらい上に、翌日の昼前である……。
ま、まあいいや、鉄虫の本隊が来る前に、火事場泥棒の如き採掘を完遂させるべく、技術系バイオロイドとか工業系ＡＧＳまでもを総動員して採掘作業が強行されている。
戦闘要員もいくらかは手伝っているらしいが、機動型などのそもそも肉体が頑健に作られていないやつとか、メイのようなそもそも肉体労働に向かないやつは休んでいるし、先の戦闘に参加したバイオロイドの大半も調整の名目で休んでいる。

そんなわけで、イフリートではないが部屋で惰眠を貪る……はずだったのだが。
「どうにかして♡」
どうにかして、じゃねえよバカヤロー。いや、ヤローじゃないけど。
寝るつもりだったところに、訪ねてきたのはセラピアス・アリス。カタログスペック上、相互確証破壊を成立させてしまうユニットの一つだったお人である。いや、人じゃないけど。あれで家政能力とかきっちり確保してるんだからすげぇの一言しか出てこない。
半分以上愚痴混じりの言い分を聞いてみれば、要約すると司令官にアピールする場を寄越せ、ということに尽きる。
セラピアス・アリスのような火力過剰型武装持ちであると、以前レアと月兎を追ったときのような、周辺ダメージを厭うて攻撃できない、なんてシーンが多い。結果、自然と出撃メンバー候補からも外れることが多くなり、武装そのものも弱装弾のようなものがあるわけでもないので節約できない。フルリンクであればその辺りの加減もなんとかできるが、そもそもの稼働コストが上がっているので意味がない。好きで資源浪費しているわけでもないのにどうしろと！
私だって司令官に抱かれたい！
オマエばかりずるい！
……でもごめんなさいマシーンになるのは嫌。
どうにかして♡
だからどうにかしてじゃねえよバカヤロー。
「なんで、みんな私に相談しに来るんですかねえ……」
「だって、あなたに相談したのは、大体が自分の望みを叶えていますもの。そんなジンクスがあるとなれば、頼りたくなってしまうのも性というものではありませんか？」
「……」
思わず頭を抱えた。
コーヒーを出そうとしたところ、やんわりと制されて入れてくれる。一口飲んで自分が淹れるよりたいそう美味しいのでそれがまた困る。

「どうしたものかしら……なんか、上官から、みたいな暗黙のルールがあるからめんどくさいのよねぇ……あからさまに破れとも言えないし」
「バトルメイドは、ラビアタお姉さまもコンスタンツァもお済みですし、そもそもそのような上下関係はほぼ無いので問題ないでしょう」
「でも、バトルメイドで火力過剰型はあなたぐらいなもんでしょ？あとは……キャノニアとか、レア、ティタニア……？」
ホライズンのセイレーンとかは……機銃に限定すれば大丈夫か。砲撃しないで。
「難しいな……いっそ、今の戦闘向きバイオロイドがたくさん休んでるところだし、過剰火力型と家政能力持ち集めてお疲れ様パーティーでも開いてお酒盛る？　安全は保証できないけど」
小人閑居して不善を為すというと違うが、あーでもないこーでもないと色々と言い募った挙げ句、疲れてきたので半ば冗談みたいなノリでそう言ってみたところ……
「それですわね」
「は？」

冗談半分の発言だったのだが……そこからは早かった。
いつも管理に働いていることや、先程述べたように過剰火力型で活躍場面が少ないバイオロイドを中心に、お疲れ様パーティーが開かれることになったのである。つまるところ、バトルメイドシリーズ、キャノニア、上位フェアリーシリーズ（つまりレアとティタニア）で集まるということで、しかもそこに立案者枠、あるいはゲスト2として呼ばれてしまったのである。無論、ゲスト1は司令官だ。
正直、後が予想できたので参加したくなかったのだが、開始時刻に司令官が直々に呼びに来たとあっては逃げられない。
「なぜ司令官が呼びに来たんです？　恐れ多いというかなんというか」
「俺が呼びに行かないと、お前来ないだろう？」
……チクショウ、読まれてやがる。

なお、パーティーのことを耳聡く嗅ぎつけてきたメイとナイトエンジェルが開場前にいたが、会場内に酒瓶があるのを見た瞬間１８０度回れ右をして逃げ出した。
その判断はとても正しいと思う。
かくて、周りはウッキウキ、私はとっても気が重いパーティーが始まったのだった。
ぶっちゃけ、パーティーの体をなしていたのはほぼ最初だけで、１０分ぐらいしたら、もう……。
詳細の言及は避けるが、一言だけ言うと「性獣大決戦」とだけ。
１名と１名と１名（私）以外は全員が完全ダウン済みだよ!!
そして２人して私に大ダウンアタックを決めてくるのはマジでやめていただきたい!!
特にそこの某ロイヤルなんとかさん!?　今の御時世にバイオロイド同士なんて不毛だよ!!
「ふふふ問題ないぞ、私にムダ毛などそもそもないからな！」
反応しづらい下ネタはやめろぉ!!

エミリーに見つめられた話

……腰が痛い。

そりゃ、アレだけの大ダウンアタックを食らい続けてしまったのだから、腰をいわしてしまうのもしょうがないと言えるだろう。

こういう時は、自分のベッドで丸くなって回復するのを待つのが一番……なのだが、今日はそうも行かない理由がある。

「……」

見てくるのだ。

エミリーが、じーっと、無言で。

昨日、性獣大決戦もとい鉱山攻略戦闘部門お疲れ様パーティーを開いたことは記憶に新しいと言うか今もその影響から抜け出すことができていないが、ほぼ乱交前提だったために一人だけ参加できていなかった人物がいる。

そう、エミリー（精神的子供）だ。

もっとも、これは独断で参加させなかったわけではなく、司令官や当のキャノニアの他のメンバー、あるいはコンスタンツァやラビアタの全員との合意のもとに参加させなかったわけで、それ自体は正しかったと思っている。子供の前で乱交する趣味はない。いや、子供の前でなくてもないが。私に見られて喜ぶ趣味はない。乱交の趣味もない。本当だぞ。

ともあれ、そのエミリーがこちらをじっと見てくるのである。

どこに行くにしても、彼女の愛銃であるジェノクスの上に座って付いてきてただじっと見つめてくるのである。

地味に罪悪感をくすぐってくる攻撃で、一体誰の入れ知恵だろうか……。

「……ねえエミリー、そうやって見つめてくるの、誰にやったらいいって言われたの？」

「司令官」

思わず枕を殴った私は悪くない。

◆　◇　◆

「というわけで、今度はオルカゲーム大会ｉｎ艦長室だー!!」
例のどんどんどんぱふぱふー、と鳴るおもちゃを駆使して一人でファンファーレを鳴らしつつ、私は宣言した。
ごめんねエミリーを兼ねているので、参加者はキャノニアメンバーにＬＲＬ、アルヴィス、ココ、司令官、コンスタンツァに私（電源系ゲーム提供）、天空のエラ（非電源系ゲーム提供）となっている。今回の件にエラは完全に無関係だったが、ゲームを借りる都合上参加してもらった方がいい、ということで参加してもらった。セティやエンプレスもゲーム仲間なのだそうだが、こちらはそういう意味でも完全に無関係なので、ゲームのプレイ人数の都合上今回は見送り。次回は呼ぶということで納得してもらった。
エミリーのこともあり、今回は精神的に幼いメンツをなるべく集めよう、ということでまずＬＲＬにアルヴィス、そしてココが候補に上がった。３人共精神的にも肉体的にもめっちゃ幼い子達である。ただ、ここに入りそうなアクアは既に司令官のお手つきということで除外（本人納得済み）となった。
アンドバリもプライベートは見た目相応とのことだが、制圧した鉱山の採掘関連で忙しいので辞退。
メスガキムーブのテティスは子供扱いしないでとぷんすこしながら去っていった。
イフリートも意外と肉体年齢が若いが、これに手を出すとそれを理由に艦長室のベッドから動かなくなりそうなので、司令官からアンタッチャブル指定を受けている。
ハチコ？　手を出したらナニを噛まれそう、としれいかんがゆってた。わたしもそうおもう。
ともあれ、今回は精神的子供組が主役であるので、それ相応に遇しなければならない。
ちびっ子ども全体にはエラがコンパニオンとして付いていて、今回はとっつきやすいゲームから始めよう、となった。無論、司令官と遊ぼう、が主旨であるので、参加メンツに司令官も入っている。それで選ばれたのは人生ゲームだ。ルーレットを回す、コマを進める、止

まったマスに書いてあることに従う、という至って簡単なルールだからだ。
……一応、旧人類滅ぶべしな内容のマスも無くはないので、司令官とフォーチュンと相談してエラッタシールを貼ってあるので教育に悪い、なんてことはないだろう。
私は1回目はＬＲＬのサポートに入り、彼女と一緒に遊ぶ。
ゲームはゲームとして割り切ってやるのが楽しむコツだ、ということで、殴れるときには殴るプレイを勧めてみた。
「え、えっ!? でも、これをしたら司令官が大変なことにならない？」
「大丈夫大丈夫、現実にやったら大変だけど、そこはゲームだから大丈夫。ゲームで一杯食わされて悔しい、っていうのもまた真っ当なことだからね。だから行ってみよう……仕返し」
「べ……別に、余は司令官からは何も、仕返しをするようなことなんて……」
「だーいじょーぶだって、ゲームならよくあることだし、今司令官一位でしょ、順位が下の側からの妨害なんてあったりまえー。それに、司令官から『あのときはよくもやってくれたな、またゲームで勝負だ！』ってなるかもー？」
「う、う……し、司令官に仕返し！」
「……ブラナッハさんに悪魔の尻尾と羽根と角が見えますね」
苦笑しながら私の甘言を見ていたエラのコメント。
「覚えてろよブラナッハぁ……」
被害担当（に私が誘導した。その後アルヴィスとココからも攻撃を受けている）の司令官の恨み言。はっはー、聞こえませんなー？
というかエミリーに入れ知恵をした段階で私からの報復がどこかであると知ってるだろうに。
案の定、司令官は開拓地送りで最下位だった。
◆　◇　◆
「というわけでターンエンドだ。何か宣言は？」
「先行1ターンキルされてるんで壁とやってろとしか言えねーです司令官」

※1：ＴＣＧ。プリビルドデッキパックそのままの私に、フルスクラッチビルドデッキをぶつけてきた司令官。誰か特定時期のレギュレーション情報をくれくださいー。全カードフルに使用可能なんて壺壺でこうなるに決まってるだろ。

※2：エラ達があーあ、って顔して見てる。

◆　◇　◆

「ここまで私をコケにしてくれたお馬鹿さんは初めてですよ……」

「あ、伝説のあるところで見つけたコミックのセリフ」（ＬＲＬ）

「というわけで！　全財産をぶん投げて私は悪魔になるぞジョジョォー!!　ターゲットはそこだぁー!!」

「うわっ、バカ、オイやめろ、せっかく育てた街がー!?」

どかぽぉぉぉぉん!!

◆　◇　◆

最終的に、大乱闘するブラザーズのアレで一騎打ちを相当に繰り広げ……置いていかれたキャノニアメンバーは早々にいなくなっており、ちびっこたち＋エミリーは全員いつの間にかふて寝していたので、各々の部屋に送り届けてお開きとなった。

はい、私も司令官も多分に大人気なかったのは理解していますので、ステレオで説教は勘弁してくださいバトルメイドのおねーさま方……。

反省しろ、と私と司令官で片付けをすることになり、司令官に放置されてぶーたれたちびっこたちが遊んでいたジェンガやら何やらをだいたい片付ける。

「……はい。全部、ちゃんとありますね」

きちんと全数揃っているかをエラに確認してもらい、後は立ち上がって腰を伸ばす。

「んーっ……」

ぽきぽきと固まった関節をほぐし、肩を回す。

つい熱中しすぎたが……まあ、うん。

後は、シャワーでも浴びてから寝ようかな……と思っていたところ、ぽん、と私の肩に手が置かれた。